

# 伊治城跡

— 平成 20 年度：第 36 次発掘調査報告書 —

平成 21 年 3 月

宮城県栗原市教育委員会

# 伊治城跡

— 平成20年度：第36次発掘調査報告書 —

平成21年3月

宮城県栗原市教育委員会

# 序 文

栗原市は宮城県の北西部に位置し、県の総面積の約11%を占め、豊かな自然と歴史的遺産が数多く残っております。貴重な歴史的遺産を次の世代に継承していくことは、今の時代を生きる私たちの責務であります。

平成20年6月14日午前8時43分に発生した岩手・宮城内陸地震では、栗原市内で震度6強を観測し、栗駒・花山地区などの山間部で大規模な山崩れなどが発生し、多数の犠牲者をだしました。また、市内の多数の文化財も甚大な被害を受けました。この地震被害により、文化財などの歴史的財産を後世まで残していく難しさを痛感し、また、その重要性を改めて感じました。現在は、「がんばろう 栗原」を合い言葉に、市全体で震災からの復興に取り組んでおり、被害を受けた文化財も所有者等の協力を得ながら修復活動を行っているところであります。

伊治城は創建年代と所在地が確定している数少ない城柵の一つで、東北地方の古代史を語る上で大変重要であり、なかでも宝亀11年（780）に「伊治公皆麻呂の乱」が起きた場所として、正史によって知ることができます。昭和52年から始まった発掘調査によって遺跡の概要が徐々に解明されてきております。平成15年には国史跡に指定され、17年に保存管理計画を策定し、今後の史跡保存について方針を定めました。平成19年には「史跡伊治城跡調査整備指導委員会」を設置し有識者から発掘調査や環境整備について指導助言を頂いております。今年度は史跡公園として整備を行うための追加資料を得ることを目的として内郭城の調査を行いました。

今後、調査成果を踏まえ、遺跡の保護や調査研究、普及啓発活動をさらに進めていきたいと考えております。

最後になりましたが、調査にご指導・ご協力していただきました、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所及び関係機関、発掘調査を実施するにあたり土地を貸していただきました土地所有者、ご協力いただきました城生野地区の方々に深く感謝申し上げます。

平成21年3月

栗原市教育委員会

教育長 佐藤光平

## 例　　言

1. 本書は宮城県栗原市築館字城生野に所在する伊治城跡の平成20年度発掘調査（第36次調査）及び平成17年度から19年度に実施された伊治城跡内での現状変更に伴う確認調査の報告書である。

2. 第36次調査は、国庫補助事業にもとづくものであり、栗原市教育委員会が主体となり、栗原市教育委員会・宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3. 調査時における地区割りは、城生野自治会館前の伊治城跡「原点1」を基準点（0. 0）とし、この点と「原点2」と結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。

基準線の南北軸は、 $2^{\circ} 7' 9''$  西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

原点1 X=−136,867.547 Y=17,758.857 (世界測地系—TKY2JGDにより変換)

原点2 X=−136,864.350 Y=17,845.295 (世界測地系—TKY2JGDにより変換)

平面図中の地区割り：S20、W20などの表記は、「原点1」から南に20m、西に20mの位置にあることを示している。

4. 本遺跡の位置を示した第2図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」、「築館」を使用して作製した。

5. 土色の記載は「新版標準土色帖」（2007）にもとづいた。

6. 本書の作成にあたっては、担当者全員の討議・検討を経て、I～IVは三浦実、Vは安達訓仁が執筆し、三浦が編集した。

7. 発掘調査および本書の作成に際しては下記の方々からご教示・ご指導を賜った。

史跡伊治城跡調査整備指導委員会 委員長 進藤秋輝（東北歴史博物館館長）、副委員長 早川浩義（栗原市文化財保護審議会）、委員 今泉隆雄（東北大学大学院教授）、委員 後藤秀一（宮城県多賀城跡調査研究所所長）

山田晃弘、村田晃一、須田良平、西村力、白崎恵介、柳沢和明、三好秀樹、生田和宏、（宮城県教育庁文化財保護課）、佐藤敏幸（東松島市教育委員会）、佐藤信行（日本考古学協会員）、高橋誠明、車田敦、二瓶雅司（大崎市教育委員会）

宮城県多賀城跡調査研究所

8. 本遺跡では、遺構に種類ごとの略号と検出順の番号を付している。種類ごとの略号は以下のとおりである。

建物跡=SB、竪穴住居跡=SI、溝跡、古墳（円形・方形周溝）=SD、土坑=SK

9. 第36次調査の成果の一部については現地説明会（平成20年11月15日）において公表しているが、すべてにおいて本書が優先する。

10. 発掘調査の記録や出土品は栗原市教育委員会が一括して保管している。

11. なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書については、本文の後の付表1にまとめて示している。

# 目 次

序 文

例 言

目 次

I. 遺跡の位置と地理的環境.....	1
II. 遺跡の概要.....	1
III. 遺跡周辺の歴史的環境.....	2
IV. 第36次調査.....	5
1. 調査要項 .....	5
2. 第36次調査の目的.....	5
3. 調査の経過と方法 .....	5
4. 基本層序 .....	7
5. 検出した遺構と遺物 .....	7
6. 考察.....	20
7. 調査のまとめ .....	24
V. 各種開発にかかる確認調査 .....	25
1. 処理槽及び水道管理設工事（1） .....	25
2. 処理槽及び水道管理設工事（2） .....	26
3. 個人住宅建設工事 .....	28
4. 集会場（城生野分館）改築・処理槽設置工事 .....	32
5. 個人住宅建設、処理槽設置工事 .....	35
付表 1. 伊治城跡の発掘調査 .....	46
付表 2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表 .....	47
伊治城跡発掘調査報告書等一覧、引用・参考文献一覧 .....	48
写 真 図 版	
報告書抄録	

## 図 目 次

- |                       |                                     |
|-----------------------|-------------------------------------|
| 第1図 東日本の古代城柵          | 第17図 内郭西側の遺構変遷                      |
| 第2図 伊治城跡と周辺の遺跡        | 第18図 V- 1 調査区の位置                    |
| 第3図 調査区と周辺の地形         | 第19図 V- 2 調査区の位置と周辺の調査区             |
| 第4図 第36次調査区遺構配置       | 第20図 SK659土坑                        |
| 第5図 SB393建物跡          | 第21図 V- 3 調査区                       |
| 第6図 SB731a・b建物跡       | 第22図 S1711住居跡・SK716土坑・SE717井戸跡      |
| 第7図 SB732建物跡          | 第23図 V- 4 調査区                       |
| 第8図 S1735住居跡          | 第24図 V- 3、V-4調査区の位置と周辺の堅穴住居跡<br>の位置 |
| 第9図 S1735住居跡出土遺物      | 第25図 V- 5 調査区の位置                    |
| 第10図 S1733・740住居跡出土遺物 | 第26図 S1724・S1725住居跡・SK726土坑         |
| 第11図 SD738断面          | 第27図 S1725住居跡出土遺物(1)-拔根直後-          |
| 第12図 SK737土坑出土遺物      | 第28図 S1725住居跡出土遺物(2)-焼土層・黒色土層-      |
| 第13図 SD736溝跡出土遺物      | 第29図 S1725上の搅乱・東区搅乱土・西区出土遺物         |
| 第14図 遺構外出土遺物(1)       | 第30図 S1725出土遺物分類                    |
| 第15図 遺構外出土遺物(2)       |                                     |
| 第16図 政府・内郭周辺遺構模式図     |                                     |

## 表 目 次

- |                  |                          |
|------------------|--------------------------|
| 第1表 ピット属性表       | 第5表 V- 3 調査遺構属性表         |
| 第2表 出土瓦一覧        | 第6表 遺物に付着する土の特徴およびその他の痕跡 |
| 第3表 第36次調査遺構属性表  | 第7表 V- 5 確認調査出土遺物観察表     |
| 第4表 報告を行う小規模調査一覧 |                          |

## 写真図版目次

- 写真図版 1 : 調査区遠景（南東より）、調査区全景（上が北）
- 写真図版 2 : 建物跡と堅穴住居跡（上が北）、SB393建物跡とSB731a・b建物跡（北から）
- 写真図版 3 : SB393NIE1柱穴断面、SB731a・b建物跡NIE3柱穴断面、SB731a・b建物跡廂柱穴断面、  
SB732建物跡（西から）、SB732建物跡柱穴断面、S1735住居跡とSK737土坑（南から）、  
S1734住居跡とSK741土坑（南東から）、S1740住居跡（北から）
- 写真図版 4 : S1735住居跡床面（西から）、S1735住居跡断面（東から）、SD738古墳周溝断面（南から）、  
SD738周溝底面（南東から）、石器No.1出土状況、石器No.1インプレント、指導委員会現地指導風景、  
現地説明会風景
- 写真図版 5 : S1735住居跡出土遺物、S1733住居跡出土遺物、S1740住居跡出土遺物、SK737出土遺物
- 写真図版 6 : 遺構外出土遺物
- 写真図版 7 : V-1. 調査区北東隅断面、V-2. SK659土坑完掘状況（南から）、V-2. SK659土坑断面（北西から）、  
V-3. 1区全景（北から）、V-3. 2区全景（南から）、V-4. 調査区全景（西から）、  
V-5. S1725住居跡（西から）、V-5. S1725住居跡（南から）、V-5. S1724住居跡（西から）、  
V-5. S1724住居跡断面（西から）
- 写真図版 8 : S1725住居跡出土遺物

## I. 遺跡の位置と地理的環境

伊治城跡は、宮城県栗原市築館字城生野に所在する。遺跡が所在する宮城県北部の地形を見ると、東側の海岸部には北上山地が、西側には奥羽山脈が南北に走り、中央部を北上川が南流している。西側の奥羽山脈は山麓部で多數の河川によって開析され、いくつかの丘陵に分岐している。そのうち、最も北側にある築館丘陵は江合川と迫川に挟まれており、丘陵端部ではさらに多くの小丘陵に分かれている。

遺跡は標高20~28mほどの小丘陵東端部に続く河岸段丘に立地しており、北側は二迫川、南側から東側にかけては一迫川、西側は北から入り込む沢によって画されている。遺跡の範囲は、これまでの調査成果や地形から、およそ東西700m、南北900mの不整五角形の広がりをもつと考えられる（第3図）。

## II. 遺跡の概要

伊治城は、8世紀後半から9世紀初頭にかけて律令政府が東北地方経営のために設置した城柵の一つである。奈良・平安時代の政治・軍事の中心地である陸奥国府多賀城と、平安時代に鎮守府が置かれた胆沢城とのほぼ中間に位置している（第1図）。

また、桃生城と共に創建年代が明らかな城柵として重要で、その所在地については多くの論考があり、本遺跡も有力な候補地の一つであった。この間の詳しい研究史については、「伊治城跡I」（宮城県多賀城跡調査研究所1978）を参照していただきたい。

昭和52年から3年間にわたる宮城県多賀城跡調査研究会の発掘調査や、昭和62年からの築館町教育委員会・宮城県教育委員会による発掘調査で、本遺跡が伊治城跡であることが明らかとなった（付表1）。

調査の結果、伊治城は、土塁あるいは大溝と築地塀による区画施設を周囲に巡らし、その内部の南に偏った部分に東西約185m、南北245mの平行四辺形に築地塀で区画したと見られる内郭を配していること、内郭の中央に東西約55m、南北約60mの方形に築地塀を巡らせた政府が存在することが明らかになった。政府には正殿を中心として脇殿や後殿、前殿などが配置されている。これらの建物群は大別して3時期の変遷があり、2時期目は火災に遭っている。内郭には建物を主体とした官衙ブロックが設けられ、特に北西部は、創建期に桁行5間の建物6棟以上が南北に開く「コ」の字型配置をとっている。外郭は、施設の違いから内郭北辺を境に2分され、南側は建物・竪穴住居などで構成



第1図 東日本の古代城柵  
(進藤1991一部改変)

される官衙城であり、伊治城全体からみて2/3以上を占める北側は、堅穴住居を主体とする住居域として利用されていたと考えられる。外郭区画施設は北辺が土塁と大溝であると考えられている。南辺では第31・33次調査で築地本体を検出している。また、この地点では火災に遭った掘立柱建物跡が確認されており、火災後に築地が位置を変えて構築されていることが判明した。さらに、火災後に外郭南辺から北にのびる築地帯が造営されており、外郭南部の区画施設の様相を考える上で、その構造や変遷が新たな課題となった。

出土遺物として特筆されるものとしては、日本で初めて弓の一種である「弩」の一部「機」が出土した（第25次調査）。

平成15年8月27日には内郭域を含む93581.47m<sup>2</sup>が国史跡に指定された。平成17年7月14日には未同意だった2900m<sup>2</sup>が追加指定され、総指定面積は96481.47m<sup>2</sup>となっている。

### III. 遺跡周辺の歴史的環境（第2図）

このことについては、「伊治城跡・嘉倉貝塚」（築館町教委2002）で詳述しており、参照していただきたい。以下では伊治城と同時代の奈良・平安時代の周辺の遺跡を概観する。

発掘調査された集落跡には、築館地区佐内屋敷遺跡（宮城県教委1983）、原田遺跡（宮城県教委1980a、2005）、嘉倉貝塚（築館町教委2002、2003、宮城県教委2003）、鰐沢遺跡（築館町教委2005）、下萩沢遺跡（宮城県教委2005、栗原市教委2008）、志波姫地区御駒堂遺跡（宮城県教委1982）、宇南遺跡（宮城県教委1980b）、大門遺跡（宮城県教委1980c）、糠塚遺跡（宮城県教委1978）、金成地区佐野遺跡（宮城県教委1980d）、栗駒地区長者原遺跡（栗駒町教委1995）、泉沢A遺跡（栗原市教委2006）、水吸遺跡（栗原市教委2007）などがある。このうち、糠塚遺跡は東に約5kmにあり、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式土器の基準資料となっている。南に約2.5kmにある御駒堂遺跡では、奈良・平安時代の遺構・遺物の他に、8世紀前半頃の関東地方からの人間の移住が想定されるような土器や住居跡が発見されており、伊治城成立以前の栗原地方の動向を考える上で注目される。南に4kmにある下萩沢遺跡では伊治城存続期と同時期の掘立柱建物跡、堅穴住居跡が発見された。集落には、溝、材木塀を周囲に巡らせていた可能性が指摘されるとともに、建物の方向を揃えて計画的に配置された建物群がみられ、また北西約2.5kmにある泉沢A遺跡でも、計画的に配置された掘立柱建物跡が発見されている。この2遺跡は他の集落とは異なる様相を示していることから、伊治城との関わりが考えられる。

生産遺跡では、西に約4kmの築館地区にある須恵器を焼いた岩ノ沢窯跡や、東に約4kmの志波姫地区にある須恵器を焼いた狐塚遺跡、北に約6kmの金成地区にある須恵器や瓦を焼いた小迫神社窯跡があげられ、製品が伊治城に供給されていた可能性が考えられる。

北に約6kmの栗駒地区的丘陵上には、銅帶金具などが発見された、33基の小円墳からなる鳥矢ヶ崎古墳群がある（栗駒町教委1972）。また、北に約2kmの築館地区には大沢横穴墓群、姉歯横穴墓群があり、伊治城を含む周辺一帯の支配層の墓と考えられる。北に約3kmの栗駒地区には『吾妻鏡』に登場する栗原寺跡と推定される地点があり、古代末の遺構や出土遺物は未確認ながらも、10世紀前半の池跡（宮城県教委1996）や平安時代中期以降の礎石建物跡（栗原寺調査団1963）が発見されており、



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	伊治城跡	城柵・散布地	沼石野・古墳・墳丘・平安	13	潘ノ沢遺跡	散布地	古代	25	糠塚遺跡	集落	弥生・奈良・平安
2	下戸武遺跡	集落	調文・古代	14	高田山遺跡	散布地	調文・古代	26	大門遺跡	集落	銅文・奈良・平安
3	萩原寺跡	寺院	古代・中世	15	原田遺跡	集落	調文・中・古代	27	孤原遺跡	空跡	古代
4	尾松遺跡	散布地	古代	16	源光遺跡	散布地	調文・古代	28	犀谷遺跡	集落	調文・古代
5	長者原遺跡	集落	吉墳前・中・古代	17	佐内屋敷遺跡	集落	調文・奈良・平安	29	鶴八九郎遺跡	集落・船跡	銅文・奈良～近世
6	泉弘人遺跡	集落	古代	18	水戸遺跡	集落	調文・中・古代	30	吹付遺跡	集落	古代
7	大仙山古墳群	円墳	古墳後・古代	19	柳沢遺跡	集落	銅文後・古代・中世	31	宇南遺跡	集落・船跡	銅文・奈良・平安～近世
8	姉幽都穴室群	礎穴型	古墳後	20	黒越台遺跡	散布地	調文・古墳・古代	32	御沟堂遺跡	集落	調文～近世
9	佐野遺跡	集落	弥生・古代	21	生萩台遺跡	散布地	調文・中～近世・古代	33	山ノ上遺跡	集落	調文・古代
10	大沢貝穴室群	横穴型	古墳後・古代	22	堂倉貝塚	集落	銅文後・弥生・古代	34	淀遺跡	散布地・集落	旧石器・古墳・古代・中世
11	塚切貝根遺跡	散布地	調文・古代	23	利敷治郎遺跡	散布地	調文・中・晚・古代	35	大天守遺跡	散布地	古代
12	高内原散遺跡	散布地	調文・古代	24	鳩敷袋遺跡	散布地	調文・古代	36	堂の沢遺跡	散布地	古代

第2図 伊治城跡と周辺の遺跡

付近からは仏像が見つかっている。



第3図 調査区と周辺の地形

## IV. 第36次調査

### 1. 調査要項

遺跡名：伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）

調査地：宮城県栗原市築館字城生野地蔵堂地内

調査主体：栗原市教育委員会 教育長 佐藤光平

調査担当：栗原市教育委員会文化財保護課 千葉長彦 三浦 実

調査指導：史跡伊治城跡調査整備指導委員会 委員長 進藤秋輝

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課 千葉直樹

調査期間：平成20年10月17日～12月12日

調査面積：約310m<sup>2</sup>

### 2. 第36次調査の目的

第36次調査は平成18年に設置された「史跡伊治城跡調査整備指導委員会」の指導のもと策定した第5次5ヵ年調査計画に基づき国庫補助事業として実施した。

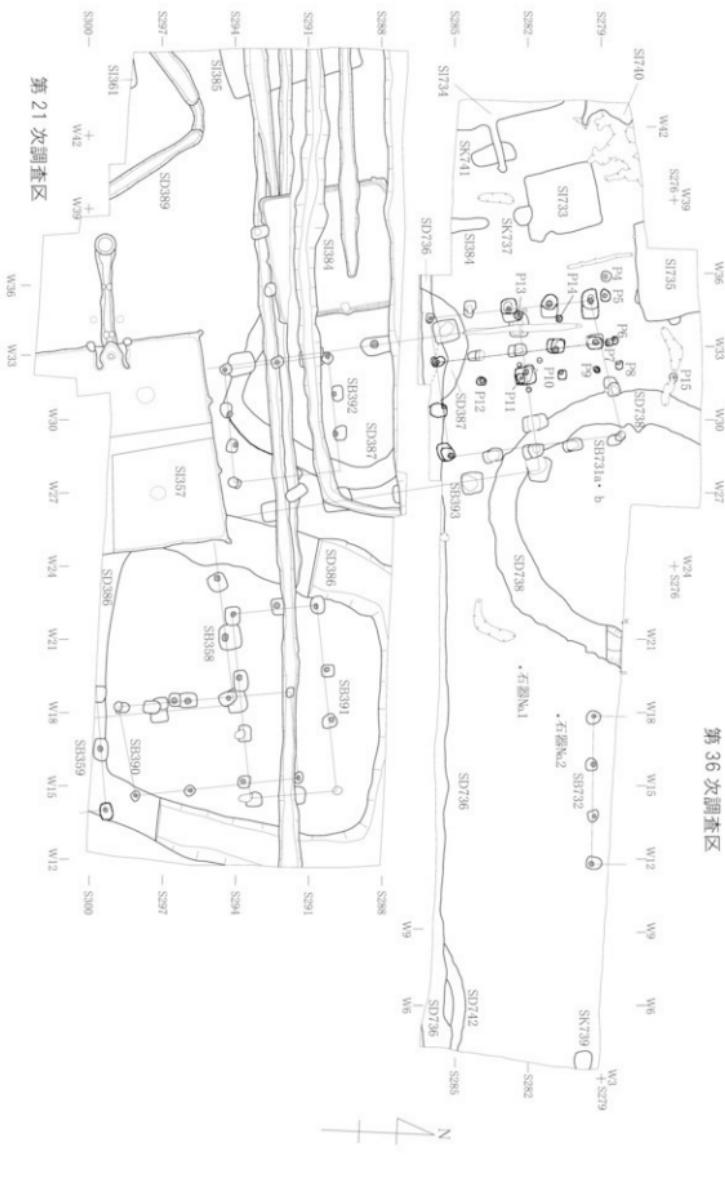
伊治城跡の調査は、これまで政府の規模や建物配置の解明、内郭と外郭の区画施設及び両地区の官衙ブロックの構造と変遷の把握を目的に実施してきた。特に政府付近では大規模な火災の痕跡が確認されており、遺構の重複関係や出土遺物から宝龟11年（780）「伊治公呂麻呂の乱」により焼失した建物群（政府Ⅱ期）、これ以前の伊治城創建期とみられる建物群（政府Ⅰ期）、火災復興後の建物群（政府Ⅲ期）の変遷が確認されている。平成19年度から開始された第5次5ヵ年計画では政府及び内郭域について史跡整備を行うための追加資料を得ることを目的とし、2年目である今年度は政府西側に位置する内郭西部の官衙ブロックの構造を把握することを目的とした。この地点付近では第20・21次調査において政府Ⅰ期及び政府Ⅱ期の官衙を構成する建物跡、政府Ⅲ期の官衙を構成するとみられる大型の堅穴住居跡と建物跡が確認されている（築館町教委1994、1995）。一方、内郭北側では第11・13・15次調査で確認された「伊治公呂麻呂の乱」以前に存在していたとみられる「コ」字形の官衙ブロックが確認されているほかは区画施設と同一方向をもつ堅穴住居跡群が確認されているのみであり（築館町教委1990、1991）、両地点の中間地点については調査が行われていないことから、官衙ブロックを構成する建物群の範囲などが明確ではなかった。このことから今回の調査では政府Ⅰ期に位置づけられているSB393建物跡の規模を確定させること、建物跡を新たに確認することを目的として調査を行うこととした。

### 3. 調査の経過と方法

今回の調査区は史跡内であることから、平成20年8月13日付け栗教文財第0813001号で現状変更等許可申請書を提出し、平成20年9月26日付け20委庁財第4の987号で許可された。

平成20年10月17日から重機により表土除去を開始し、その後遺構確認作業を行った。遺構は断面確認のための一部掘り下げ以外は平面確認のみである。その結果、掘立柱建物跡、古墳（円形・方形周

第36次調査区



第21次調査区

第4図 第36次調査区構構配置

溝)、溝跡などを確認した。その後、調査区西側で確認したSB731の規模を確認するため10月23日に調査区の西側と北側一部、11月6日に南側一部の拡張を行った。これにともない、新たに堅穴住居跡、土坑を確認した。最終的に確認した遺構は掘立柱建物跡4棟(建替えを含む)、堅穴住居跡5軒、古墳3基、土坑3基、溝跡1条、ビット12個である。11月10日に調査整備指導委員会が開催され、現地指導及び調査計画について指導助言を得た。調査成果の概要が判明した11月15日に現地説明会を開催し、約80名の参加者を得た。11月17日までに平面図、断面図を作成し、ラジコンヘリによる空中写真や遺構細部の写真撮影を実施した。平面図、断面図は縮尺1/20で作成し、写真記録は一眼レフのデジタルカメラ(700万画素)で行った。11月18日から人力で重要部分の埋め戻しを行った。その後12月11、12日に重機による埋め戻しを行い、野外調査を終了した。埋め戻しは遺構面を厚さ0.2mの黒ボク土で覆い、その上に掘り下げて発生した土を被せて行った。

#### 4. 基本層序

本調査区では以下の層を確認することができた。

I層：表土。調査区全体に分布する。層厚10~20cm。

II層：黒褐色シルト(10YR2/3)。調査区全体に分布する。層厚10~15cm。

III層：暗褐色シルト(10YR3/3)。黄褐色土ブロックが入る。部分的に見られる。層厚15~20cm。

IV層：黄褐色粘土質シルト(10YR5/8)。地山。

#### 5. 検出した遺構と遺物

今回の調査で検出した主な遺構は、掘立柱建物跡4棟(建替えを含む)、堅穴住居跡5軒、古墳3基、土坑3基、溝跡1条、ビット12基である(第4図)。この内、SB393、SB731a・b、SB732、SI735、SD738について一部掘り下げ精査を行った。

遺物は、各遺構や表土から土師器、須恵器、瓦、石器などが整理用コンテナで1箱出土している。

##### (1) 掘立柱建物跡

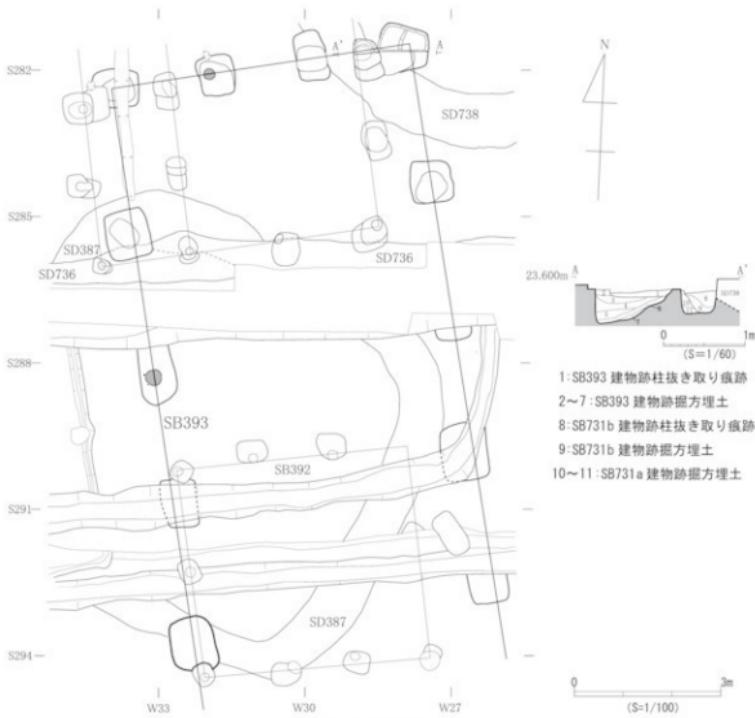
建て替えを含む4棟の建物跡を確認した。

【SB393建物跡】(第5図)

調査区中央よりやや西で確認した。第21次調査で一部確認しており、今回はあらたに北側部分を確認した。桁行5間以上、梁行3間の南北棟建物跡で建替えは認められない。SB731a・b、SD387、SD736、SD738と重複し、SD387、SD738より新しく、SB731a・b、SD736より古い。第21次調査区では政府Ⅲ期に位置づけられているSI357より古い。柱穴を6個確認し、すべてで柱抜き取り穴を確認した。

平面規模は、桁行が西側柱列で北から2.85m、2.90m、2.90m、3.00mで総長11.65m以上、梁行が北側柱列で西から1.95m、2.15m、1.90mで総長6.00mである。建物の方向は、N-10°-Wである。柱穴は一邊が0.6~1mの方形を呈し、深さは断ち割ったところで0.4mである。掘方埋土は暗褐色シルト層と黄褐色地山ブロックを多く含む層の互層である。

遺物は柱穴掘方より非ロクロ調整の土師器壺の口縁部小破片が出土している。外面、内面ともにナデ調整が行われている。



第5図 SB393建物跡

#### 【SB731 a・b建物跡】(第6図)

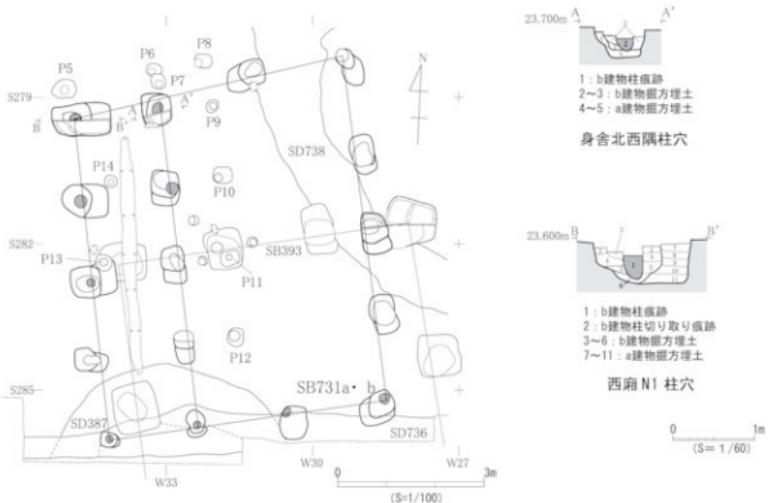
調査区中央よりやや西で確認した。桁行4間、梁行2間の西側に廂が付く南北棟建物跡で、一度建替えられている。SB393、SD387、SD736、SD738と重複しSB393、SD387、SD738より新しく、SD736より古い。柱穴は身舎で12個、廂で5個確認し、うち身舎の5ヶ所、廂の4ヶ所で柱痕跡、身舎の7ヶ所、廂の3ヶ所で柱抜き取り穴や切り取り痕跡を確認している。南側柱列はSD736によって削平を受けているため残存状況は悪い。

b 建物の柱穴はa 建物の柱抜き取り穴を利用しており、平面規模は桁行が西入側柱列で北から1.70m、1.50m、1.65m、1.70mの総長6.55m、梁行は南側柱列で西から1.85m、2.00mの総長3.85mで廂の出は1.85mである。建物の平面形は北東隅が張り出す歪んだ形になる。建物の方向は、西入側柱列で測るとN-10°-Wである。身舎の柱穴は一辺が0.3~0.65mで隅丸方形を呈している。深さは断ち割ったところで0.25~0.45mある。掘方埋土は暗褐色シルトを主体とする層と黄褐色シルトを主体とする層からなる。柱痕跡は径約0.25mで堆積土は暗褐色シルトに黄褐色地山粒が含まれる。廂の柱穴

は一边が0.3~0.8mで隅丸方形を呈し、深さは断ち割ったところで0.5mある。掘方埋土は暗褐色シルト層と黄褐色地山ブロックを多く含む層の互層である。柱痕跡は径約0.25mで堆積土は暗褐色シルトに黄褐色地山粒が含まれる。焼土や炭化物は含まれない。

a建物は、b建物と同規模、同方向とみられる。身舎の柱穴は一边が0.4~0.7mで隅丸方形を呈し、深さは断ち割ったところで約0.4mある。掘方埋土は暗褐色シルトを主体とする層と黄褐色シルトを主体とする層からなる。廡の柱穴は一边が0.3~0.9mで隅丸方形を呈し、深さは断ち割ったところで約0.5mある。埋土は暗褐色シルトを主体とする層と黄褐色地山ブロックを多く含む層の互層である。

遺物は、a建物の掘方埋土より非クロ調整土師器、ロクロ調整土師器、瓦が出土している。非クロ調整土師器は甕体部片が出土しており、外面にハケメ調整、ナデ調整、内面にナデ調整が行われている。ロクロ調整土師器は甕体部片が出土している。瓦は平瓦で凹面に布目の後にナデ調整がみられ、凸面には繩タタキが行われている。いずれも小破片である。



第6図 SB731a・b建物跡

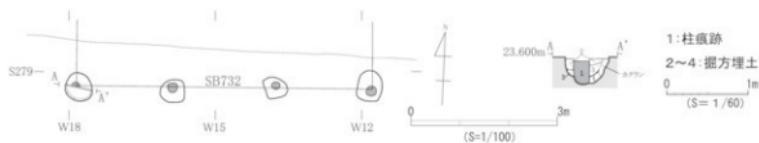
#### 【SB732建物跡】(第7図)

調査区中央北側で確認した東西3間の掘立柱建物跡である。検出状況から、確認したのは南側柱列で、建物は調査区の北側に展開するものと考えられる。柱穴を4個確認し、全てで柱痕跡を確認している。建替えは認められない。

平面規模は、柱間寸法が西から2.00m、2.10m、2.00mの総長6.10mである。方向は南側柱列でE-2°-Sである。柱穴は一边が0.4~0.5mの不整な隅丸方形、円形を呈す。深さは断ち割ったところで確認面から約0.35mである。掘方埋土は暗褐色シルトを主体とし黄褐色地山ブロックが含まれる。

柱痕跡は径0.2mで堆積土は暗褐色シルトを主体とし黄褐色地山粒がまばらに含まれる。

遺物は出土していない。



第7図 SB732建物跡

## (2) 穫穴住居跡

5軒確認した。S1735住居跡は一部床面まで検出したがその他については平面確認のみである。

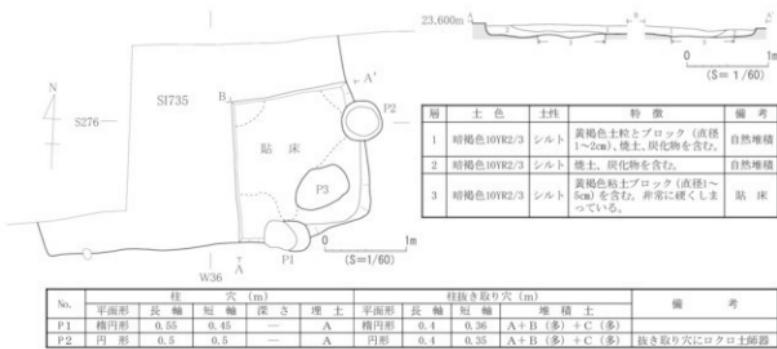
### S1735住居跡 (第8図)

調査区西側で確認した。住居跡の南側を確認し、その他は調査区外に延びる。南東部を床面まで掘り下げた。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西4m、南北2.2m以上である。カマドは確認できなかった。方向は東辺でN-10°-Wである。

堆積土は2層確認した。1、2層ともにしまりのない暗褐色シルトで焼土、炭化物を含む自然堆積層である。1層には黄褐色地山ブロック（直径1.2cm）が含まれる。地山と貼床を床面としており、凹凸がみられる。地山をそのまま壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は南壁で床面から約0.15mある。

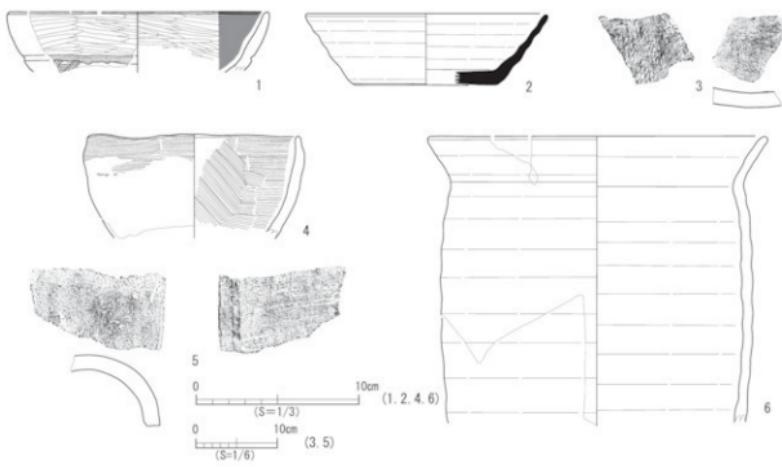
壁を掘り込み、竪穴外に張り出す柱穴を2基確認した（P1、P2）。いずれも住居跡堆積土に覆われ、検出状況から住居跡にともなうものと考えられる。平面形は楕円形、円形を呈し、両方で柱抜き取り穴を確認した。抜き取り穴には焼土、炭化物が多く含まれる。

床面の南東隅で長軸0.7m、短軸0.45mの不整形な落ち込みを確認している（P3）。位置や大きさから貯蔵穴の可能性が考えられる。堆積土はしまりのない黒褐色シルトである。



第8図 S1735住居跡

遺物は、堆積土1～2層から非ロクロ調整土師器、須恵器、瓦、P2柱抜き取り穴から非ロクロ調整土師器、ロクロ調整土師器（第9図6）、瓦が出土している。堆積土から出土している非ロクロ調整土師器には壺の口～体部片（第9図1）や口縁部片、甕の体部片や底部片がある。壺は外面にナデ調整やミガキ調整、内面にナデ調整やミガキ調整後黒色処理が行われている。甕は外面にナデ調整やハケメ調整、内面にナデ調整が行われている。須恵器は壺（第9図2）、甕体部片が出土している。瓦は平瓦で凹面に布目痕の後にナデ調整、凸面に縄タタキが行われている。P2から出土している非ロクロ調整土師器には壺（第9図4）、甕体部片がある。壺、甕とともに外面にナデ調整、内面にナデ調整が行われている。瓦は丸瓦で凹面に布目痕がみられ、凸面には縄タタキが行われている（第9図5）。



No.	種別	層位	特徴	写真図版	登録番号
1	土師器壺	1層	口～体部片。口径15.8cm、器高3.7cm以上。外：口～体、ミガキ、体部に横ナデ、ハケメ。内：ミガキの後黒色処理。	5-3	R017
2	須恵器壺	1層	1/4残存。口径14.6cm、底径9cm、器高4.4cm。外：ロクロナデ、底：マメツ、内：ロクロナデ。	5-10	R009
3	平瓦	1層	破片。厚さ1.8cm。凹：布目後ナデ、凸：縄タタキ。	5-5	R009
4	土師器壺	P2抜き取り穴	口～体部片。口径12.7cm、器高6.4cm以上。外：口縁部ロコナデ、内：ヨコナデ。	5-2	R008
5	丸瓦	P2抜き取り穴	破片。厚さ2.0cm。凹：布目、凸：縄タタキ、側：ケズリ。	5-4	R002
6	土師器甕	P2抜き取り穴	口～体部片。1/3残存。口径20.5cm、器高17.8cm以上。外：ロクロナデ、内：ロクロナデ。口縁部～胴部上半部にかけて一部焼が付着している。	5-1	R001

第9図 S1733住居跡出土遺物

#### 【S1733住居跡】（第4図）

調査区西側で確認した。SK737と重複し、これより古い。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西2.7m、南北2.8mである。方向は西辺でN-14°-Wである。南東隅が不整になっており、この部分の堆積土には焼土、炭化物が多く含まれる。このことから南東隅にカマドが付設され、住居廃絶時に壊されたと考えられる。堆積土は暗褐色シルトを主体とし黄褐色地山ブロック（直径2～5cm）、黄褐色地山粒、焼土、炭化物が含まれる。

遺物は検出面から非クロロ調整土師器甕、須恵器坏、甕、瓦が出土している。非クロロ調整土師器甕は口縁部片が出土しており、内外面ともにナデ調整が施されている。須恵器甕は体部片が出土しており外面に平行タタキ、内面に無文の押さえ痕跡がある。瓦は丸瓦が出土し凹面に布目痕がみられ、凸面に綾タタキが行われている（第10図1）。

#### 【S1734住居跡】（第4図）

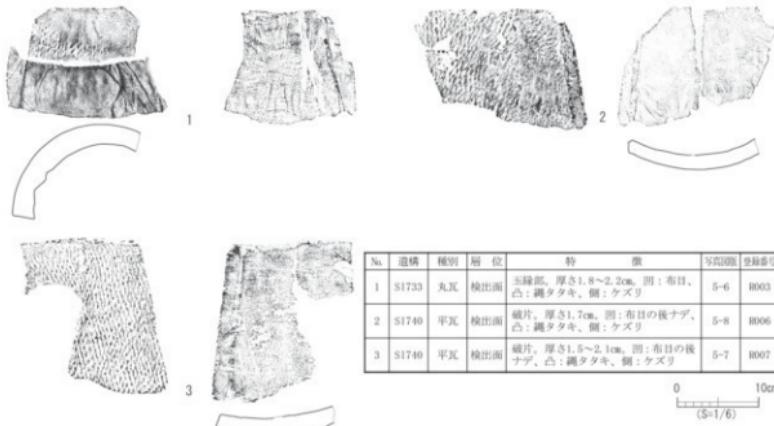
調査区南西隅で確認した。SK741と重複し、これより新しい。東辺のみ確認し、その他は調査区外に延びるため全体の形態、規模は不明である。確認した部分で東辺4.5m以上である。方向は東辺でN-13°-Wである。カマドは東辺に付設されており、煙道は長さ2.1m、幅0.4mである。堆積土は暗褐色シルトを主体とし、黄褐色地山粒を含む。カマド付近の堆積土には白色粘土ブロックが含まれる。また、煙道先端部分の堆積土には焼土、炭化物が多く含まれる。

遺物は出土していない。

#### 【S1740住居跡】（第4図）

調査区北西隅で確認した。住居跡の北東隅と東辺の一部を確認し、その他は調査区外に延びるため全体の形態、規模は不明である。確認した部分で東辺は2m以上である。方向は東辺でN-30°-Eである。焼土ブロック、炭化物が集中し、煙道を確認していることから東辺にカマドが付設されていたと考えられる。煙道は長さ0.85m、幅0.24mである。堆積土は暗褐色シルトで黄褐色地山ブロック（直径1～2cm）、炭化物が少暈含まれる。

遺物は検出面から非クロロ調整の土師器甕、瓦が出土している。土師器は体部片、底部片が出土しており、体部片は外面にナデ調整、内面にはナデ調整やハケメ調整、底部には木葉痕が見られる。瓦は平瓦で凹面には布目の後にナデ調整がみられ、凸面に綾タタキ、側面にはケズリが行われている（第10図2・3）。



第10図 S1733・740住居跡出土遺物

#### 【SI384住居跡】(第4図)

調査区西側で確認した南北方向の溝状遺構である。SI384は第21次調査区で住居跡本体が確認されている。床面で確認している焼け面がカマド燃焼部と考えられており、今回確認した部分は、その延長線上に位置することと形状から煙道と推定される。住居跡北壁から煙道先端までの長さは3.7m、煙道の幅は0.4~0.5mである。堆積土は暗褐色シルトが主体であり、黄褐色地山ブロック、焼土、炭化物を含む。また、わずかに白色粘土ブロックを含む。

遺物は出土していない。

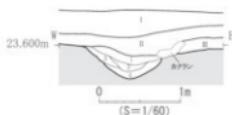
#### (3) 古墳

3基確認した。円形や方形に巡る溝状遺構である。墳丘と考えられる盛土や主体部は確認されていないが、平面形やこれまで行われた調査（第13・19・21次）の結果から墳丘の削平された古墳と考えられる。

#### 【SD738古墳】(第4・11図)

調査区ほぼ中央で確認した。周溝の南半を確認し、調査区の北側に延びる。SB393、SB731a・bと重複し、これらの中で最も古い。円形を呈し、規模は溝の内側で東西約8.0m、南北7.5m以上である。溝の幅は1.0~1.5m、深さは断ち割ったところで確認面から約0.3m、断面形は開いたU字形を呈している。堆積土は黒褐色シルトを主体としている。溝の底部付近や墳丘側には黄褐色地山ブロックが多く含まれ、墳丘の盛土が崩れたものと考えられる。自然堆積である。

遺物は1層上面から須恵器高台付坏底部片が出土している。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りである。



層	遺構名	土 色	土 性	特 櫻	備 考
1		黒褐色10YR2/3	シルト	黄褐色土粒を含む	自然堆積
2		黒褐色10YR3/3	シルト	黄褐色土粒を多く含む	自然堆積
3	SD738	黒褐色10YR2/3	シルト	直径1~2cmの黄褐色土ブロックを含む	自然堆積
4		黒褐色10YR2/3	シルト	直径3~4cmの黄褐色土ブロックを多く含む	自然堆積

第11図 SD738断面

#### 【SD742古墳】(第4図)

調査区南東隅で確認した。北端部のみの確認で残りは調査区外に延びる。SD736と重複し、これより古い。一部のみの確認のため全体の規模は不明であるが、平面形は円形を呈するとみられる。溝の幅は0.4~0.5mで堆積土は暗褐色シルトを主体とし黄褐色地山ブロックが含まれる。自然堆積である。平面確認にとどめているため深さや底面の形状は不明である。

遺物は出土していない。

#### 【SD387古墳】(第4図)

調査区西側で確認した。調査区の南側に延びる。21次調査で確認しており今回はその北側部分を確認した。SB393、SB731a・b、SD736と重複し、これらの中で最も古い。平面は隅丸方形を呈し、規模は溝の内側で東西7.1m、南北6.6m、溝の幅は0.8~1.2mである。平面確認にとどめているため深さ

や底面の形状は不明である。堆積土は黒褐色シルトで自然堆積である。

遺物は検出面から非クロロ調整の土師器甕体部片が出土している。内外面ともにナデ調整が行われている。

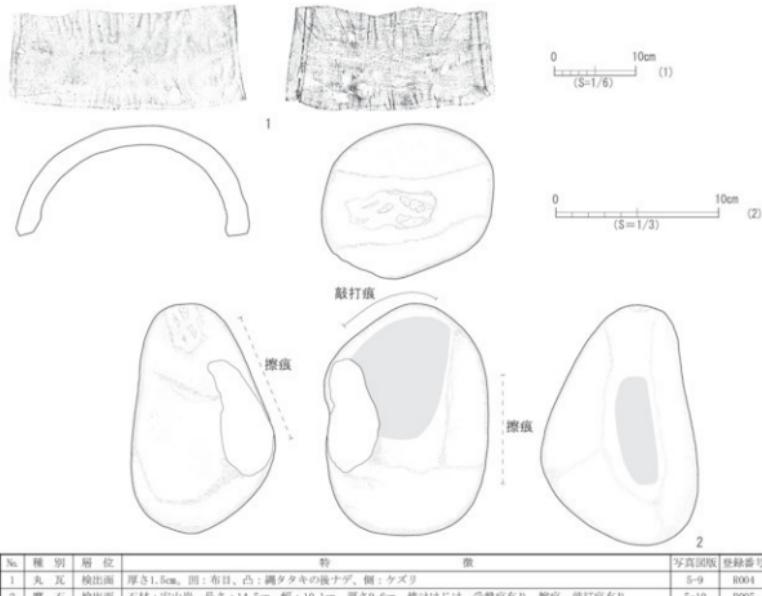
#### (4) 土坑

3基確認した。平面確認にとどめているためいずれも性格は不明である。

##### 【SK737土坑】(第4図)

調査区西側で確認した。SI733と重複し、これより新しい。平面形は梢円形で、規模は長軸0.8m、短軸0.7mである。平面確認にとどめているため深さや底面の形状は不明である。堆積土は暗褐色シルトを主体とし、SI733住居跡に由来すると考えられる焼土、炭化物、白色粘土ブロックが含まれる。

遺物は検出面から非クロロ調整の土師器甕体部片と瓦、磨石が出土している。土師器は外面にハケメ調整、内面にハケメ調整後ナデ調整が行われている。瓦は丸瓦で、凹面には布目痕がみられ、凸面は縄タタキ後ナデ調整が行われている(第12図1)。磨石は熱を受けて赤変している部分があり、熱を受けた後に擦痕、敲打痕がみられる(第12図2)。



第12図 SK737土坑出土遺物

#### 【SK739土坑】(第4図)

調査区北東隅で確認した。一部のみの確認であり、調査区外に延びる。平面形は隅丸方形で、規模は長軸0.75m以上、短軸0.7mである。平面確認にとどめているため深さや底面の形状は不明である。堆積土は暗褐色シルトを主体とし黄褐色地山粒が含まれる。自然堆積である。

遺物は検出面から非クロクロ調整の土師器、須恵器が出土している。土師器は壺体部片が出土しており外面にハケメ調整、内面にナデ調整が行われている。須恵器は壺体部片が出土しており、外面に平行タタキ、内面には格子状の押さえが行われている。いずれも小片である。

#### 【SK741土坑】(第4図)

調査区西側で確認した。S1734と重複しこれより古い。平面形は長楕円形で、規模は長軸1.8m、短軸0.8mである。平面確認にとどめているため深さや底面の形状は不明である。堆積土はしまりのない黒褐色シルトである。自然堆積である。

遺物は出土していない。

### (5) 溝跡

#### 【SD736溝跡】(第4図)

調査区南辺沿いで確認した。一部のみ確認し、調査区外に延びる。SD387、SD742、SB393、SB731 a・bと重複し、この中で最も新しい。平面確認にとどめているため深さや底面の形状は不明である。長さ31.5m以上で、溝の幅は約1mである。堆積土は黒褐色シルトを主体とし、黄褐色地山ブロックが含まれる。自然堆積である。

遺物は検出面から須恵器壺底部片、壺体部片が出土している。須恵器壺の底部の切り離し技法は回転ヘラ切りでその後ナデ調整が行われている(第13図1・2)。



第13図 SD736溝跡出土遺物

### (6) ピット(第4図)

調査区中央から西側にかけて12個確認した。平面確認にとどめているため深さなどは不明である。遺物は出土していない。以下に、一覧にして記す。なお、P1～P3はS1735住居跡内で確認した壁柱穴、貯蔵穴である。

第1表 ピット属性表

No.	柱 穴 (m)					柱 痕 路 (m)				備 考
	平面形	長軸	短軸	深さ	埋 土	平面形	長軸	短軸	堆 積 土	
P4	隅丸方形	0.50	0.45	—	A1	円 形	0.22	0.20	A1+A4	
P5	楕円形	0.52	0.40	—	A1	円 形	0.19	0.17	A2	
P6	楕円形	0.32	0.20	—	B2	円 形	0.18	0.14	A1	P6→P7
P7	隅丸方形	0.32	0.30	—	A1 (ブロック多)	円 形	0.16	0.14	A1 (ブロック少)	P6→P7
P8	隅丸長方形	0.34	0.28	—	B2	円 形	0.18	0.16	A1	
P9	楕円形	0.32	0.25	—	A2 (ブロック少)	円 形	0.16	0.14	A2	
P10	隅丸長方形	0.40	0.32	—	A2 (ブロック多)	円 形	0.18	0.15	A1 (ブロック少)	
P11	隅丸方形	0.39	0.30	—	A2	円 形	0.11	0.10	B4	SB093→P11
P12	楕円形	0.40	0.34	—	A1	円 形	0.23	0.20	A4+炭化物	
P13	円 形	0.35	0.32	—	A	円 形	0.18	0.15	A1	SB093→SB731→P13
P14	円 形	0.25	0.24	—	A	円 形	0.12	0.10	A1	
P15	隅丸方形	0.33	0.31	—	A3 (ブロック多)	円 形	0.12	0.11	A	

A : 黄褐色シルト (10YR10/3) を主体とする。

A1 : 黄褐色地山岩 (10YR5/6) を含む。A2 : 黄褐色地山岩ブロック (直角1~2cm) を含む。A3 : 黄褐色地山岩ブロック (直角2~3cm) を含む。A4 : 黄褐色シルト (10YR1/0) を含む。

B : 黄褐色シルト (10YR1/4) を主体とする。

B1 : 黄褐色地山岩 (10YR5/6) を含む。B2 : 黄褐色地山岩ブロック (直角1~2cm) を含む。B3 : 黄褐色地山岩ブロック (直角2~3cm) を含む。B4 : 黄褐色シルト (10YR3/3) を含む。

## (7) 遺構外出土遺物

遺構確認の際に表土や基本層から縄文土器、土師器（壺、甕）、須恵器（壺、甕、蓋）、瓦（平瓦、丸瓦）、鉄製品（釘？）、石器が出土している。ここでは特徴的な遺物について説明する。

### 【瓦】(第15図1~6)

表土及び基本層から出土している。出土地点は調査区西側（W30~42付近）に集中している。丸瓦、平瓦が出土している。遺構から出土しているものも含め一覧に記す。(第2表)

### 【土師器】(第15図9)

表土から出土した。器種は甕である。口縁部が外反し、体部は張りの弱い球形状になる。調整は外面が口縁部にナデ調整、体部にハケメ調整、内面にナデ調整が行われている。古墳時代前期の塙釜式に位置づけられると考えられる。

### 【石器】(第14図)

黒色頁岩製の石匙1点と珪質頁岩製の剥片3点が出土している。このうち珪質頁岩製剥片2点は黄褐色シルト（基本層IV層）から出土しており、後期旧石器時代に位置づけられると考えられる。また、もう1点の剥片はカクランからの出土であるが、2点の剥片と出土位置が近く、石材も共通していることから後期旧石器時代に位置づけられると考えられる。石器No.3は薄く湾曲しており、背面に多方

第2表 出土瓦一覧

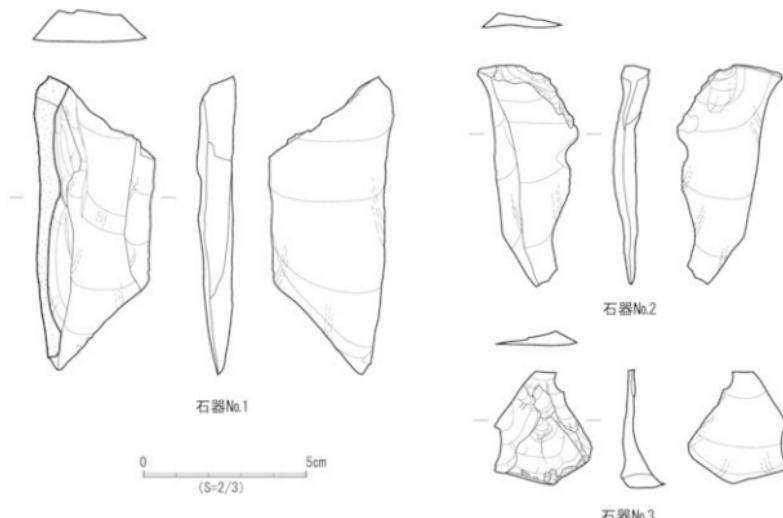
出土地点	層 位	点 数
SB731S1W1	a層方埋土	平瓦1点
S1733	検出面	丸瓦1点
S1735	堆1層	平瓦1点
	F2抜き取り穴	平瓦1点
S1740	検出面	平瓦2点
SK737	検出面	丸瓦1点
遺構外 (S1733付近)	I 層	平瓦1点
遺構外 (S1735付近)	I 层	丸瓦2点
遺構外 (S1740付近)	I 层	丸瓦1点
遺構外 (SD387付近)	I 层	平瓦1点
	II 层	平瓦1点
遺 構 外	表 採	平瓦1点

向からの剥離痕がみられる。調整時に生じた剥片と考えられる。

#### 【板碑】(第15図10)

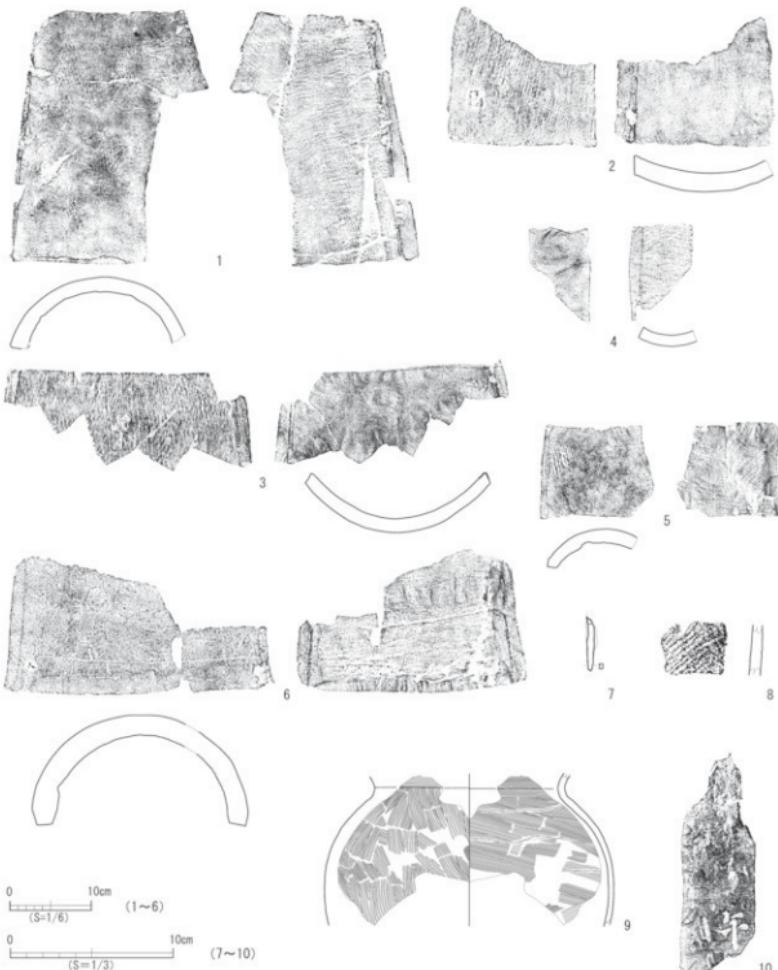
調査区西側の表土から出土した。破片であり、残存しているところで長さ14.3cm、幅4.3cm、厚さ0.8cmである。石材は雄勝または登米産のスレートを用いている。文字は年号の一部と見られる「午」であり、葉研彫りで彫られている。石材が近世ではほとんど使われないスレートを用いていること、文字の刻み方などから板碑と考えられる。

参考藤信行氏によるよる、スレートの使用は二迫川流域で多くみられるもので、近世になるとほとんど使用されなくなるとのことである。類例は大林寺(栗原市若柳)、雷神社(栗原市鶴沢)にある。



No.	種別	地区	層位	特徴	写真図版	登録番号
石器No.1	剥片	中央	基 IV	石材：頁岩。打面形が欠損。長さ9.0cm、幅3.5cm、厚さ1.0cm。 背面に自然面が残る。	6-10	R021
石器No.2	剥片	中央	基 IV	石材：頁岩。打面形が欠損。長さ7.0cm、幅2.9cm、厚さ0.6cm。 縦長剥片。	6-11	R022
石器No.3	剥片	中央	カクラン	石材：頁岩。長さ3.3cm、幅3.0cm、厚さ0.9cm。 調整剥片か。	6-12	R023

第14図 遺構外出土遺物 (1)



No.	種別	地 区	層 位	特 権	集	写真図版	登録番号
1	丸 瓦	SIT33付近	表 土	厚さ1.6~2.1cm, 回: 布目, 凸: 溝タタキ, 側: ケズリ。		6-1	R011
2	平 瓦	SIT33付近	表 地	広端部片。厚さ2.3cm, 回: 布目, 凸: 溝タタキ, 側: ケズリ。		6-3	R014
3	平 瓦	SIT33付近	表 土	狭端部片。厚さ1.6cm, 回: 布目の後ナデ, 凸: 溝タタキ, 側: ケズリ。		6-5	R012
4	平 瓦	SIT40付近	表 土	厚さ1.4cm, 回: 布目, 凸: 溝タタキ, 側: ケズリ。		6-6	R025
5	丸 瓦	SIT35付近	表 土	広端部片。厚さ2.0cm, 回: 布目, 凸: 平行タタキ, 線刻1条, 側: ケズリ。		6-4	R015
6	丸 瓦	SIT33付近	表 土	厚さ1.7cm, 回: 布目, 凸: 溝タタキ, 側: ケズリ。		6-2	R013
7	鉄製品釘?	中央南側	表 土	破片。現存する長さ3.3cm, 幅0.4cm, 厚さ0.3cm, 断面四角形。鍛取り途中で固化。			R018
8	調文土器	中 央	表 土	体部片。LR調文。		6-8	R019
9	土師器甕	SIT35付近	表 土	口~底部片。外: 口縁部ヨコナデ, 体部ハケメ、内: 口縁部ヨコナデ, 体部ヨコナデ		6-7	R016
10	板 砖	S0987付近	II 層	破片。石材: スレート。長さ14.3cm, 幅4.5cm, 厚さ0.8cm以上。「午」篆研記入		6-9	R020

第15図 遺構外出土遺物 (2)

第3表 第36次調査遺構属性表

No.	特徴	規模(総長)	柱間	方向	時期	重複	備考
SB393	南北棟	桁行4間以上(11.65m以上) 梁行3間(6.00m)	北から2.85m、2.90m、2.90m、3.00m 西から1.95m、2.15m、1.90m	N-10°-W	政府Ⅰ期	SD387、SD728→ SB393-SBT31a・b →SD736	柱穴0.6~1mで方形。 柱穴を一度行っていい。
SB731 a・b	西廻り 南北棟	桁行4間(6.55m) 梁行2間(3.85m)	北から1.70m、1.50m、1.65m、1.70m 西から1.85m、2.00m	N-10°-W	政府Ⅲ期 以降	SD387、SD728→ SB393-SBT31a・b →SD736	西廻り土器よりクロコ土師 器片出土。
SB732	—	総長6.10m	西から2.00m、2.10m、2.00m	E-2°-S	中世以降		

## 掘立柱建物跡

No.	平面形	規模	方向	時期	重複	備考
S1733	隅丸方形	南北2.8m、東西2.7m	N-14°-W	伊治城期	S1733→SK737	平面確認。南東隅にカマド付設(魔術時に破壊)
S1734		東辺4.5m以上	N-13°-W	伊治城期	SK741→S1734	平面確認。東辺にカマド付設。
S1735	隅丸方形	南北2.2m以上、東西4m	N-10°-W	政府Ⅲ期		一部床面まで掘り下げる。床は地山を利用し、一部點床。床面東隅に貯藏穴。南北、東辺に壁柱穴。壁柱穴抜き取り穴からクロコ土師器出土。
S1740	隅丸方形?	東辺2m以上	N-30°-E	伊治城期		平面確認。東辺にカマド付設。
S1384	構状	幅0.4~0.5m、 長さ3.7m		政府Ⅲ期	SD387→S1734→ SD386、SD381、SD382、 SD383	埋道のみ確認。住居跡本体は第21次調査区で確認。

## 豎穴住居跡

No.	平面形	規 模	堆 積 土	時 期	重 複	備 考
SD738	円形	塗の内側で東西約8.0m、南北約7.5m以上 周溝:幅1.0~1.5m、深さ0.5m	周溝: 黒褐色シルト	古墳時代	SD728→SB393→ SB731a・b	周溝のみ確認。 周溝の断面形は開いたU字形。
SD742	円形か	周溝: 幅0.4~0.5m	周溝: 暗褐色シルト、黄褐色地山ブロックを含む	古墳時代	SD742→SD736	周溝のみ確認。 周溝確認。
SD387	方形	塗の内側で東西約7.1m、南北約6.6m以上 周溝:幅0.8~1.2m	周溝: 黒褐色シルト	古墳時代	SD387→SB393→ SB731a・b→SD736	周溝のみ確認。 周溝確認。 第21次調査でも確認。

## 古墳(円形・方形周溝)

No.	平面形	長 軸	短 軸	堆 積 土	時 期	重 複	備 考
SK737	楕円形	0.8m	0.7m	暗褐色シルト、燒土、灰化物、白色 粘土ブロックを含む	古代以前	S1733→SK737	平面確認
SK739	隅丸方形	0.75m以上	0.7m	暗褐色シルト、黃褐色地山粒を含む	古代以前		平面確認
SK741	長楕円形	1.8m	0.8m	黒褐色シルト	古代以前	SK741→S1734	平面確認

## 土 坑

No.	平面形	規 模	堆 積 土	時 期	重 複	備 考
SD736	東西	長さ31.5m以上 幅約1.0m	黒褐色シルト。黄褐色地山ブロック を含む	古代以前	SD387、SD742、 SB393、SB731a・b →SD736	平面確認

## 溝 跡

## 6. 考 察

第36次調査は、政庁西側に位置する内郭西部の官衙ブロックの構造を把握することを目的として調査を行った。検出した遺構は、掘立柱建物跡4棟（建替えを含む）、竪穴住居跡5軒、古墳（円形・方形周溝）3基、土坑3基、溝跡1条、ピット12個である。遺物は、遺構や表土、基本層から縄文土器、古墳時代の土師器、古代の土師器、須恵器、瓦（平瓦、丸瓦）、鉄製品、石器が整理用コンテナで1箱分出土した。

### (1) 遺構の重複関係

確認した遺構には、次のような重複関係が認められた。なお、この重複関係は第21次調査の成果も踏まえている。



※重複関係のない遺構としてSB732建物跡、SI735住居跡、SI740住居跡、SK739土坑がある。

### (2) 遺構の特徴と年代

伊治城の政庁及び内郭付近では、これまでの調査で大規模な火災の痕跡が確認されている。遺構の重複関係や出土遺物から宝亀11年（780）「伊治公皆麻呂の乱」により焼失した建物群（政庁Ⅱ期）、これ以前の伊治城創建期とみられる建物群（政庁Ⅰ期）、火災後に復興された建物群（政庁Ⅲ期）の変遷が確認されている。

#### ①掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は4棟（建替えを含む）確認した。

SB393建物跡は第21次調査で一部が確認されており、今回はあらたに北妻を確認した。南妻はSI357住居跡に壊されているため確認することはできない。建物の規模は桁行4間以上（総長11.6m以上）、梁行3間（総長6.0m）の南北棟である。第21次調査では梁行を2間と想定していたが、今回の調査で北妻は3間であることがわかった。柱穴は一辺0.6～1mの方形を呈し、掘方埋土は暗褐色シルト層と黄褐色地山ブロックを多く含む層の互層である。また、柱抜き取り穴に焼土や炭化物が含まれない。これは政庁Ⅰ期の建物の特徴に共通したものであり、第21次調査の成果と同様である。内郭北西部において確認され、政庁Ⅰ期に位置づけられている「コ」の字形官衙ブロックを構成する建物群（第11、13、15、17次調査）は、桁行5間（総長約15.0m）、梁行2間（総長約6.0m）であり、SB393建物跡はこれらの建物群とほぼ同規模であると想定される。

SB731a・b建物跡は桁行4間、梁行2間の西廻付南北棟建物跡である。重複関係では政庁Ⅰ期に位

置づけられるSB393建物跡より新しい。これまで確認されてきた官衙ブロックを構成する建物より柱穴の規模が小さく、柱間寸法が短い。また、建物の平面形が歪んでいる。断ち割った北西隅柱のa掘方埋土からはロクロ調整上師器甕の体部片が出土している。以上の点からSB731a・b建物跡の年代は8世紀末以降と考えられ、政庁Ⅲ期以降に位置づけられる。

SB732建物跡は南側柱列が3間の建物であり、のこりは調査区の北側に展開する。柱穴の規模は0.4~0.5mで、掘方埋土は暗褐色シルトである。伊治城でこれまでに確認されている同様の柱穴をもつ建物は中世以降に位置づけられている。このことからSB732建物跡の時期は中世以降と考えられる。

## ②堅穴住居跡

5軒確認した。SI735住居跡の一部を床面まで掘り下げた以外は平面確認のみにとどめている。

堆積土の状況や出土遺物などから5軒とも伊治城期に位置づけられるものと考えられる。

SI384住居跡は、第21次調査で住居跡本体を、今回の調査では煙道部分を確認した。第21次調査の成果では遺構の位置関係から政庁Ⅲ期に位置づけられている。

床面まで掘り下げたSI735住居跡の堆積土からは土師器、須恵器が出土している。土師器は非ロクロ調整の壺と甕があり、壺には外面にミガキ調整、内面にミガキ後黒色処理が施されている。甕には内外面ナデ調整のものと外面にナデ調整後ハケメ調整、内面にナデ調整が施されたものがある。住居廃絶時のものと考えられる柱穴(P2)の抜き取り穴からはロクロ調整の土師器甕、平瓦が出土している。よって、SI735住居跡の年代は8世紀末から9世紀初頭とみられ政庁Ⅲ期に位置づけられると考えられる。

SI733住居跡、SI734住居跡については、SI735住居跡と方向がほぼ一致することから計画的に配置された可能性があり、また政庁Ⅲ期に位置づけられているSI357住居跡、SI384住居跡とも方向がほぼ一致している。このことから、これらの住居跡は同時期に存在していた可能性も考えられる。しかし、SI735住居跡の堆積土は自然堆積であるのに対して、SI384住居跡、SI357住居跡は人為的に埋め戻されており、異なっている部分もある。また、SI740住居跡はこれらの住居群とは方向が異なることから、時期が異なる可能性が考えられる。

## (3) 内郭西部の官衙ブロックについて(第16・17図)

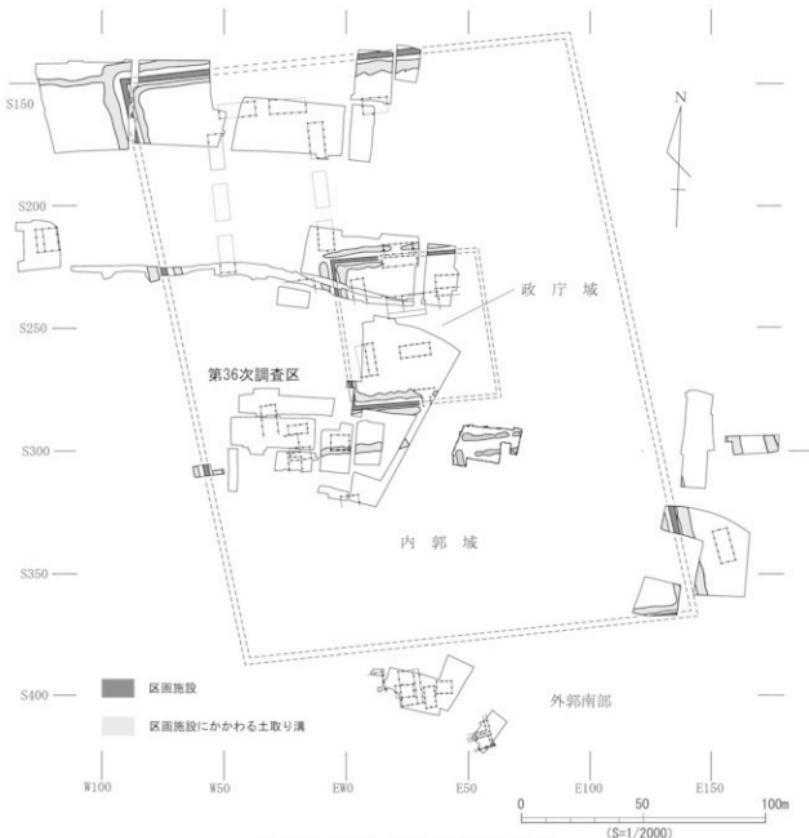
内郭西部ではこれまでに政庁Ⅰ期及び政庁Ⅱ期の官衙を構成する建物跡、政庁Ⅲ期の官衙を構成するとみられる建物跡と大型の堅穴住居跡が確認されている(第11・13・15・20・21次調査)。内郭北西部では政庁Ⅰ期の官衙を構成する「コ」の字形に配置された建物群と区画施設と同一方向をもつ政庁Ⅱ期以降に位置づけられている堅穴住居跡群が確認されている。

第36次調査区は第21次調査区の北隣に設定し、第21次調査で確認されているSB393建物跡の規模の確定と、官衙ブロックを構成する建物跡を新たに確認することを目的として調査を行った。

調査の結果、伊治城期の建物跡と堅穴住居跡を確認した。その中で、政庁変遷(I~Ⅲ期)に該当あるいは推定できたものは、SB393建物跡(I期)、SI384住居跡、SI735住居跡(以上、Ⅲ期)、SB731a・b建物跡(Ⅲ期以降)である。建物跡と堅穴住居跡が確認できる状況は、これまで内郭西部で確認している状況と共通しているものである。

今回の調査で確認した伊治城存続期に位置づけられる遺構の分布は調査区の西半に集中していた。調査区東半で確実に伊治城期に位置づけられる遺構は確認できなかった。周囲の遺構の残存状況から削平を受けたとは考えにくく、初めから官衙ブロックを構成する建物等は存在していなかった可能性が考えられ、政庁西辺築地からSB393建物跡までの約50mの区間が空閑地になっていたことになる。周囲ではII期以降になると建物等が造られる（II期：SB358、III期：SB359、SB391、SI357、SI384）ようになるが、第36次調査区東半についてはII期以降も建物等が造られることはなく、一貫して空閑地のままである。空閑地の範囲や場の性格については今後の検討課題である。

今回の調査で確認されたSB731a・b建物跡は、伊治城が機能していた際の官衙ブロックを構成する建物と比較すると柱穴規模が小さく、柱間寸法も短いものであり、平面形も歪んでいる。建物の時期



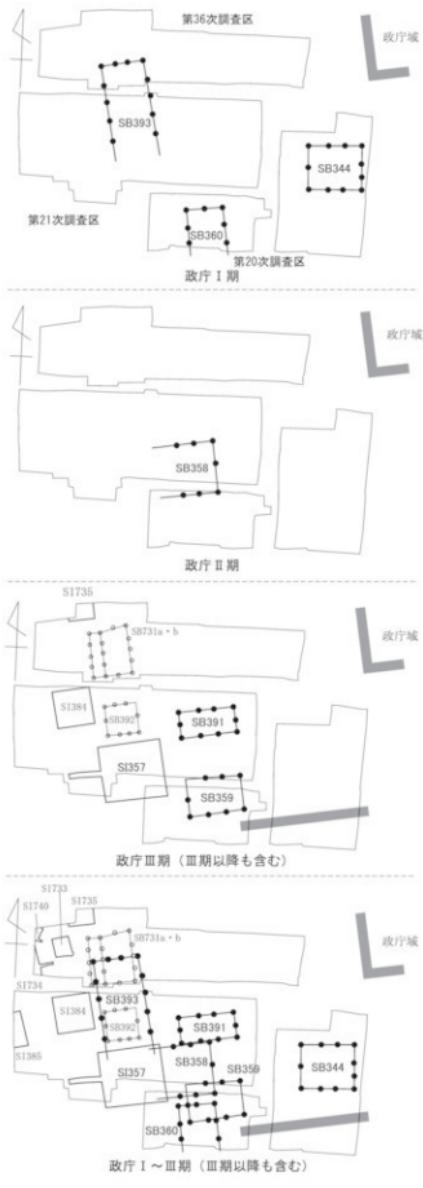
第16図 政庁・内郭周辺遺構模式図

は出土遺物から8世紀末以降と考えられ、政府Ⅲ期以降に位置づけられる。またSB731a・b建物跡は、南にあるSB392建物跡（第21次調査）と建物の方向が一致し、東側柱列が揃う。この2棟の建物の距離は約4.5mであり、両者は、柱穴の規模や特徴、柱間寸法も共通することから、計画的に配置され、同時に存在していた可能性が考えられる。これらの建物は、周囲で確認されている政府Ⅲ期の堅穴住居群と方向がほぼ一致している。

政府Ⅲ期（SB359、SB391、SI357、SI384、SI735）あるいはⅢ期以降（SB392、SB731a・b）と考えられる遺構は第16図に示した。Ⅲ期あるいはⅢ期以降とみられる遺構は、いずれも重複関係をもたない。しかし、Ⅲ期の官衙を構成するSI357とⅢ期以降とみられるSB392の距離は0.75m、Ⅲ期のSI384とSB392、SB731a・bの距離は極めて近接しており、同時に存在していた可能性は低いことから、Ⅲ期の遺構とは時期差があることが想定される。

また、建物跡はⅠ期ないしⅡ期の官衙を構成する建物跡の位置とほぼ同位置に造営され、Ⅰ期、Ⅱ期の建物跡の位置を踏襲しているとみられる。また、SI357を除く堅穴住居群は建物跡の西側にあり、方向がほぼ一致し計画的な配置が想定される。さらに、調査区東半は政府Ⅰ～Ⅲ期にわたり一貫して空闊地のままである。

つまり、第20、21、36次調査区周辺では、政府から西に向かって空闊地、建物跡、堅穴住居跡という位置関係が存在し、遺構の変遷からその位置関係は踏襲されていることがうかがえる。Ⅲ期以降とみられる遺構（SB392、SB731a・b）についても前代か



第17図 内郭西側の遺構遷び

らの位置を踏襲した配置が行われている。

このことから、第36次調査で想定されたⅢ期以降の遺構群は、Ⅲ期の遺構と時期差があることが考えられるが、それまでの位置関係を踏襲した配置であることから、近接した時期のものであることが想定される。

今回の調査成果は政府Ⅲ期以降の内郭西部の様相を考える上で重要な成果と考えられる。

## 7. 調査のまとめ

- ① 第36次調査は、政府西側に位置する内郭西部の官衙ブロックの構造を把握することを目的として調査を行った。検出した主な遺構は、掘立柱建物跡4棟（建替えを含む）、竪穴住居跡5軒、古墳（円形・方形周溝）3基、土坑3基、溝跡1条、ピット12個である。遺物は、遺構や表土、基本層から縄文土器、古墳時代の土師器、古代の土師器、須恵器、瓦（平瓦、丸瓦）、鉄製品、石器が出土した。
- ② 検出した遺構のうち古代と考えられる遺構はSB393建物跡、SB731 a・b建物跡、SI384住居跡（煙道部分のみ）、SI733住居跡、SI734住居跡、SI735住居跡、SI740住居跡である。
- ③ 古代の遺構のうちSB393建物跡は伊治城政府Ⅰ期、SI384住居跡は政府Ⅲ期に位置づけられている。SI735住居跡は出土遺物より8世紀末から9世紀初頭に位置づけられ、伊治城政府Ⅲ期に位置づけられる。
- ④ SB731 a・b建物跡は南北4間、東西2間の西廂付南北棟である。出土遺物から8世紀末以降に位置づけられ、政府Ⅲ期以降に位置づけられる。第21次調査で確認したSB392建物跡と同規模、同方向であり、同時に存在していた可能性がある。
- ⑤ 第20、21、36次調査区周辺では政府から西に向かって空闊地、建物跡、竪穴住居跡という位置関係が存在する。政府Ⅰ～Ⅲ期までの遺構はそれぞれの位置を踏襲しているので、その配置には計画性があることがうかがえる。今回の調査で確認された政府Ⅲ期以降の遺構群（SB392建物跡、SB731 a・b建物跡）もその位置を踏襲した配置となっている。政府Ⅲ期の遺構群と政府Ⅲ期以降の遺構群（SB392建物跡、SB731 a・b建物跡）は、非常に近接しているが重複関係をもたない。このことから時期差があることが想定される。しかし、政府Ⅲ期以降の遺構群はそれまでの位置関係を踏襲した配置であることから、近接した時期のものであることが想定される。

## V. 各種開発にかかる確認調査

ここでは平成17年度以降に各種開発にかかる実施された確認調査について報告を行なう。これらの調査の多くは浄化槽設置（個人及び市設置型）に伴うものであり、重要な遺構が検出された場合、位置をずらすなどの保存協議を実施している。今回報告を行なう確認調査は以下のとおりである。

報告	所在地	原 因	調査期間	確認調査面積	確認調査担当
V-1	要害120	浄化槽・水道	平成17年4月25日、27・28日	7.2m <sup>2</sup>	千葉・安達
V-2	唐崎105	浄化槽・水道	平成17年5月6日、9・11・12日	5.1m <sup>2</sup>	千葉・大場
V-3	大堀69-1	個人住宅・簡易浄化槽	平成19年5月8~12日	43.5m <sup>2</sup>	安達
V-4	唐崎46-5	集会場改築・浄化槽	平成19年7月23日、27日	14.5m <sup>2</sup>	千葉・三浦
V-5	大堀97	個人住宅・居久根抜根 浄化槽	平成19年6月11~13日、18日 平成19年6月27日	38.4m <sup>2</sup> 15.1m <sup>2</sup>	大場・安達・三浦 千葉・大場

第4表 報告を行なう小規模調査一覧

### 1. 浄化槽及び水道管理設工事 (1)

#### (1) 調査の経過

平成17年4月、栗原市築館字城生野要害120における浄化槽及び水道管理設に伴う協議を受けた。付近には外郭北辺の存在が想定されている。浄化槽部分は確認調査、水道管部分は工事立会いを実施した。平成17年4月25日、浄化槽設置部分東西3.6m、南北2mに調査区を設定し、掘り下げを行った。盛土があつく崩落の危険があるので、掘削は浄化槽掘削底面である2.3mまでとした。深さ1.5~1.7m付近の黒色土内より近代頃の磁器が出土した。遺構や古代の遺物は確認されなかった。引き続き平成17年4月27、28日に水道管理設部分について浄化槽の接続部分から市道までの立会いを行った。浄化槽付近では盛り土内でおさまることを確認した。また交差点付近でも深さ0.6mまで黒色土内であり、さらに0.4mほど掘り下げると地山となる。このことから住宅の北側では盛り土内及び黒色土内で掘削がおさまることが確認された。市道側の本管接続部分は0.6mで地山面となる。一辺20cmほどの隅丸方形のピット1基を確認した。掘削位置を0.4m北にずらし、ピットは保存することとした(第18図)。

#### (2) 浄化槽地点の基本層序

確認された基本層は以下のとおりである。基本層は北側に傾斜する。

I層 盛り土。西側は厚い。北東隅での厚さは0.8mである。

II層 黒色土。しまりではなく、さらさらする。炭化物を含む地点もある。厚さ0.15m。

III層 灰褐色粘土。穢を若干含む。厚さ0.3m。

IV層 黄褐色粘土が主体で褐色土を含む。厚さ0.2m。西側はやや厚い。

V層 黒色粘土。炭化物を含み、近代頃とみられる磁器が出土する。厚さ0.19m。

VI層 黒褐色粘土。

以下、掘り下げは行っていないので不明である。

### (3) まとめ

確認調査及び工事立会いを実施したが、古代の遺構を確認することはできなかった。この地点は、以前作成された地形測量図をみると住宅の北側ですぐ法面となるように描かれる(多賀城研1979)。さらに周辺の観察から交差点付近は西側へ向かう沢の沢頭であると考えられる。ここは外郭北辺推定線の候補地点ではあるが、調査面積が狭いことから外郭区画施設について検討する材料を得ることができなかつた。



第18図 V-1調査区の位置

## 2. 浄化槽及び水道管理設工事 (2)

### (1) 調査経緯

平成17年2月、栗原市築館字城生野唐崎105における浄化槽及び水道管理設に伴う協議を受けた。周辺には農道改良工事の際に、墨書き土器が多数出土した第13次調査西区(築館町教委1992)、廂を持つ大型建物であるSB540が確認された第28次調査区があり、官衙ブロックの存在が想定されている(築館町教委2004)。浄化槽部分は確認調査、水道管部分は工事立会いを実施した。平成17年5月6日に浄化槽設置部分の確認調査を実施した。調査範囲は東西3m、南北1.7mである。現況より0.5mで地山となる。南西隅で長軸0.8m以上の円形の落ち込みを確認したが、落ち込みからは磁器やビンなどが出土し、壁面にはこの落ち込みに伴う水道管があるので近年まで使用された井戸と考えられることから掘り下げは行わなかった。引き続き、平成17年5月9、11、12日に浄化槽の接続部分から市道までの水道管理設部分の長さ46mについて工事立会いを実施した。掘削幅は0.3m、深さは0.6~0.8mである。浄化槽から南側10mほどまでは暗褐色土内で掘削はおさまるが、建物の南側では地山面まで掘削がお

よぶ。この地点で土坑（SK659）1基が確認された。堆積土には灰白色火山灰ブロックが含まれ、赤焼き土器や土師器が出土した。これより南側では市道付近で地山面を確認したほかは既存水道の掘削内でおさまる（第19図）。

## （2）基本層序

確認された基本層序は以下のとおりである。

I 層 表土。層厚約20～40cm。

II 層 暗褐色（10YR3/3）粘土。層厚約10cm。

III 層 黄褐色粘土。

## （3）検出された遺構と遺物

### 【SK659土坑】（第20図）

II層上面から確認された。掘削範囲の関係上、平面形は不明である。南側は配管や削平により不明であるが、大きさは南北約2m、深さは0.2mである。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。堆積土は地山粒を含む暗褐色粘土や灰白色火山灰ブロックや地山粒を含む黒褐色粘土である。また、堆積土が残存する地点の南側約1.1mでは地山面上で炭化材が確認された。

遺物は堆積土より赤焼き土器壺、製作にロクロを用いた土師器壺の破片が出土している。また、土坑の廃土から製作にロクロを用いた土師器壺、土坑中央に埋設されているパイプの掘り方より須恵器壺の破片が出土した。これらはいずれも小片のため図化できなかった。



第19図 V-2調査区の位置と周辺の調査区

#### (4) まとめ

浄化槽確認地点では遺構は確認されなかつたが、工事立会い地点で土坑1基を確認することができた。土坑は赤焼き土器、製作にロクロを用いた土師器甕が出土したことや堆積土に灰白色火山灰が含まれることから灰白色火山灰が降下する以前の9世紀後半から10世紀前葉のものと考えられ、伊治城期以降のものと想定される。確認範囲が狭く詳細を把握できなかつたが、底面が平坦で壁が急に立ち上がりことから堅穴住居跡の可能性もある。



第20図 SK659土坑

### 3. 個人住宅建設工事

#### (1) 調査にいたる経緯と調査方法

平成18年12月、栗原市築館字城生野大堀69-3における個人住宅建設に伴う協議を受けた。対象地は外郭北側、伊治城期のものと考えられる住居跡が確認された第1・4・5次調査区の北側に位置する。擁壁や簡易浄化槽などの掘削を伴うこと、堅穴住居跡などの存在が想定されたことから、確認調査を行うこととした。平成19年5月8日より擁壁設置部分と砂利道予定地に調査区を設け、重機により掘り下げを行ったところ、堅穴住居跡、土坑、井戸跡、溝などが確認された。工事計画では簡易浄化槽部分を除き遺構面まで掘削がおよばないことが判明したので、遺構の性格や年代を確認するため部分的に遺構を掘り下げて精査を行い、各種記録を作成した。5月12日に埋め戻しを行い、調査を終了した。

#### (2) 基本層序

確認された基本層は次のとおりである。

I層 黒褐色（10YR3/1）粘土。厚さ55~65cm。表土。

II層 明黄褐色（10YR6/6）粘土で、本調査区内での地山である。遺構はこの面で検出している。

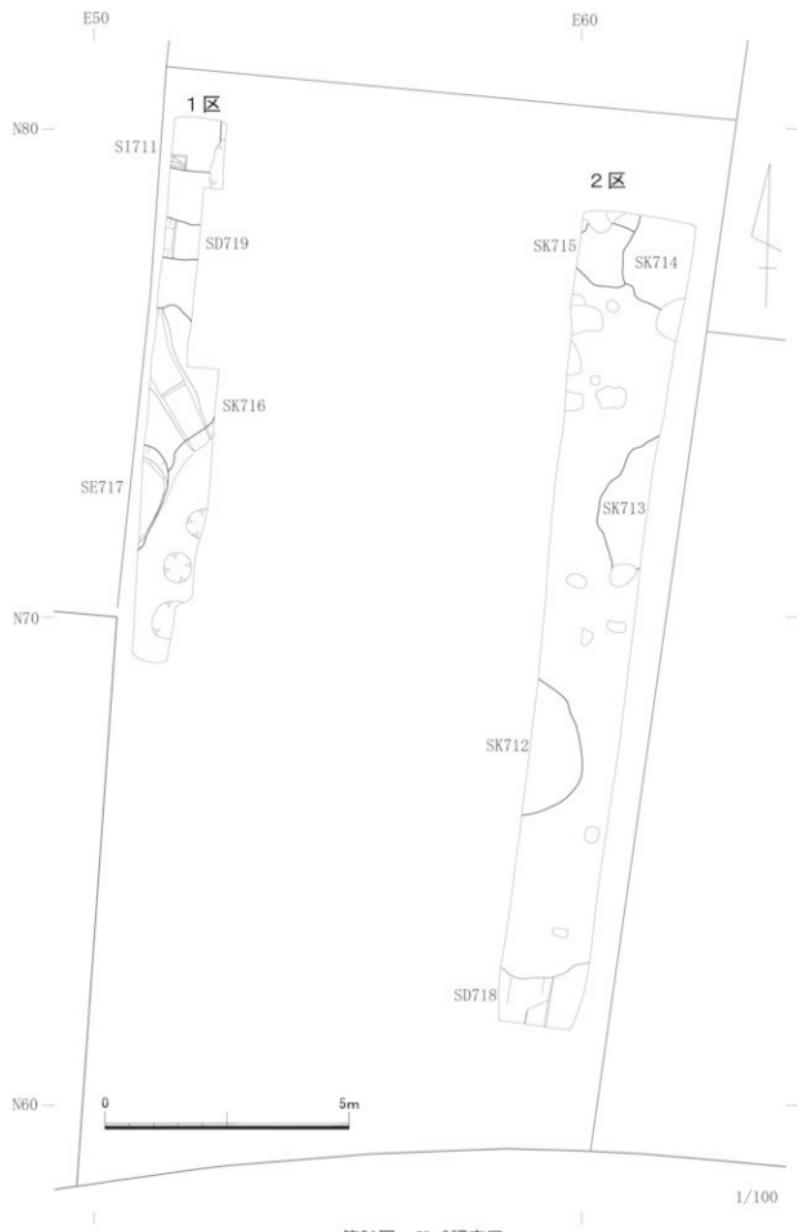
#### (3) 検出された遺構と遺物

検出された遺構は堅穴住居跡1軒、土坑5基、井戸跡1基、溝2条である（第21図）。堅穴住居跡、土坑、井戸跡の一部について掘り下げを行い、そのほかの遺構については平面のみの確認とした。

##### ①堅穴住居跡

###### 【S1711住居跡】（第22図）

1区北側、南東隅付近が確認された堅穴住居跡である。遺構は調査区北西に続く。平面規模は東西1.0m以上、南北1.03m以上である。平面形は方形を基調とするものと考えられる。方向は東辺で計測するとN-2°-Eである。堆積土は1層で地山粒を含む黒褐色粘土である。部分的に断ち割りを行い、床面を確認した。掘方埋土を床としている。掘方は地山ブロック、地山粒を多く含み、黒色粘土粒をまばらに含む灰黄褐色粘土である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面までの深さは5cmである。壁際で幅8cmの壁材抜き取り痕と幅12~26cmの掘り方を確認した。掘り方の深さは12cmである。



第21図 V-3調査区

遺物は堆積土から須恵器壺の頸部とみられる破片が1点出土した。外面及び内面ともにロクロナデが行われるが、小片のため図示できなかった。

#### ②土坑

土坑は5基を確認し、そのうちの1基について、年代や性格を把握するため部分的に掘り下げを行った。掘り下げを行った1基について報告し、そのほかは第5表に示す。

#### 【SK716土坑】(第22図)

1区で確認された。SE717と重複し、これより古い。規模は南北2.60m、東西2.52m以上で調査区の南西側と北東側に続く。平面形は梢円形と考えられる。壁は下部では壁の崩落によりオーバーハングしており、上部は急に立ち上がり、外側に開く。オーバーハングする範囲はSE717まで続く。深さ1.25mまで掘り下げを行ったが、底面の形態は完掘していないので不明である。堆積土は壁の崩落土とみられる人頭大の地山ブロックを含む黒褐色シルト及び黒褐色粘土と灰黄褐色砂が交互にレンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

遺物は出土していない。

#### ③井戸跡

#### 【SE717井戸跡】(第22図)

1区で確認された。SK716と重複し、これより新しい。規模は南北2.17m、東西0.52m以上で西側に続く。平面形は円形と考えられる。壁は急に立ち上がる。深さ0.8mまで掘り下げを行ったが、底面の形態は完掘していないので不明である。堆積土は上部が地山ブロックを含む黒褐色粘土で人為堆積と考えられる。下部は灰黄褐色粘土や黒褐色粘土で自然堆積と考えられる。

遺物は人為堆積土より須恵器壺、甕、土師器甕と近代以降とみられる磁器小杯の破片が出土した。須恵器壺は底部の破片であり、外面、内面ともにロクロナデが行われ、外面の下部はケズリ調整されている。底部は切り離しの後、回転ヘラケズリである。甕は体部破片で外面は平行タタキやロクロナデ、内面はタタキや無文の押さえ目がみられる。土師器甕は体部破片で外面、内面ともにロクロナデが行われ、内面に粘土の付着が認められる。いずれも小片のため図示できなかった。

#### ④溝跡

溝は2条確認した。詳細については第5表に示す。

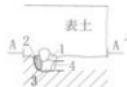
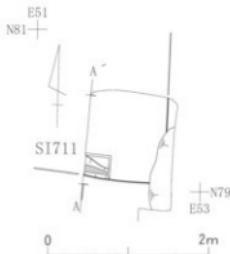
第5表 V-3 調査区遺構属性表

遺構名	位置	平面形	規模(東西×南北)	堆積土	出土遺物	備考
SK712	2区	円形か	1.0m以上×2.86m	にふい 黒褐色 (10YR4/3) シルトで地山小ブロック、繩、黒色土粒を含む	須恵器壺(体部、外面ロクロ、内面押さえ目)	
SK713	2区	梢円形か	1.0m以上×2.87m	黒褐色 (10YR3/2) ～にふい 黑褐色 (10YR4/3) シルトで地山小ブロック、繩を含む	なし	
SK714	2区	円形か	1.8m以上	にふい 黑褐色 (10YR4/3) シルトで地山小ブロック、繩、黒色土粒、にふい 黑褐色シルトを含む	土師器甕(外面ケズリ)	SK714→SK715
SK715	2区	円形か	1.1m以上×1.30m	黒褐色 (10YR3/2) 粘土で地山粒、地山ブロックを含む	なし	SK714→SK715

#### 土 坑

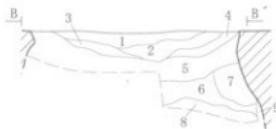
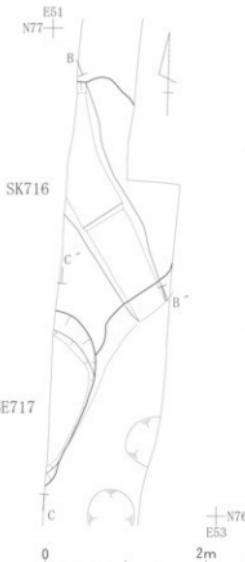
遺構名	位置	方向・規模	堆積土	出土遺物	備考
SD718	2区	東西横、幅1.4m以上、長さ1.6m以上、深さ20cm以上	黒褐色粘土	土師器小片	表土が入り込む
SD719	1区	東西横、幅0.84m、長さ0.7m以上、深さ8cm	黒褐色 (10YR3/1) 粘土、地山粒をまばらに含む	なし	

#### 溝 跡



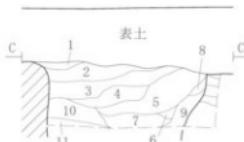
層	土色	土性	特徴	堆積範囲
1	黒褐色10YR3/1	粘土	細かい地山鉢をまばらに含む。自然。	
2	黒褐色10YR3/1	粘土	細かい地山鉢を多く含む。	斜抜き取り部
3	黒褐色10YR3/1	粘土	地山ブロックを含む。	溝掘り方
4	灰黄褐色10YR4/2	粘土	地山ブロック、細かい地山ブロックを多く、黒色土鉢をまばらに含む。	掘り方

SI711



層	土色	土性	特徴	堆積範囲
1	黒褐色10YR2/2	シルト	地山小ブロック、黒色土ブロック、縫を多く、炭化物わずかに含む。	
2	にぶい黄褐色10YR6/4	シルト	地山小ブロックをまばらに含む。	
3	灰黄褐色10YR4/3	砂	地山小ブロックをまばらに含む。	
4	黒褐色10YR3/1	粘土	地山鉢をまばらに含む。	
5	黒褐色10YR2/1	粘土	人頭大・拳大の地山ブロックをやや多く含む。	
6	黒褐色10YR2/1	粘土	拳大の地山ブロックをまばらに含む。	
7	灰黄褐色10YR6/2	砂	地山小ブロック、黒色土ブロックをまばらに含む。豊原層。	
8	黒褐色10YR3/2	粘土	人頭大の地山ブロック、黒色土を含む。豊原層土か。	
9	褐灰色10YR6/1	砂	地山ブロックを含む。	

SK716



層	土色	土性	特徴	堆積範囲
1	明黃褐色10YR6/6	粘土	黒褐色粘土をまばらに含む。	
2	黒褐色10YR3/2	粘土	地山ブロックをまばらに含む。	
3	黒色10YR2/1	粘土	地山ブロックを多く含む。	
4	帯褐色～にぶい黄褐色10YR6/6～10YR6/4	粘土	黒色粘土ブロック、灰黄褐色シルトをまばらに含む。	人為堆積
5	灰黄褐色10YR4/2	粘土	地山ブロック、地山小ブロック、縫をまばらに含む。	
6	黒褐色10YR3/2	粘土	地山小ブロックをまばらに含む。	
7	灰黄褐色10YR4/2	粘土	地山小ブロック、黒色粘土ブロックをまばらに含む。	
8	灰黄褐色10YR4/2	シルト	地山小ブロックをまばらに含む。	
9	褐褐色10YR3/3	粘土	地山小ブロック、黒色粘土小ブロックをまばらに含む。	
10	黒褐色10YR3/2	粘土	地山ブロックをまばらに含む。	
11	黒色10YR2/1	粘土	地山ブロックをまばらに含む。	

SE717

第22図 SI711住居跡・SK716土坑・SE717井戸跡

## ⑤遺構出土遺物

表土から古代と近世の遺物が若干出土した。古代の遺物には須恵器壺、壺蓋、土師器甕がある。須恵器壺は底部が切り離しの後手持ちヘラケズリが行われる。壺蓋は外面、内面ともにロクロナデが行われ、天井部は回転ヘラケズリにより平坦となっている。土師器甕は摩滅しており特徴は捉えられない。いずれも小片のため図示できなかった。

## (4)まとめ

確認調査の結果、古代の堅穴住居跡1軒、古代以降とみられる土坑、井戸跡などが確認された。古代の堅穴住居跡は一部が確認されたのみで詳細な規模や年代は不明である。また、精査を実施していないので、詳細な時期は把握できなかった。周辺で行われた第1・4・5次調査では伊治城期のものと想定されている堅穴住居跡が多数確認されていることから、これらの住居跡と同時期である可能性も考えられる（第24図）。

土坑や井戸跡については堆積土の状況が第32、34次調査（註）で確認された古代の遺構より新しく、堆積土から近世陶器の破片が出土した土坑と類似することから、近世以降のものと考えられる。

註 平成17年度及び平成19年度に外郭西辺で実施された。未報告。

## 4. 集会場（城生野分館）改築・浄化槽設置工事

### (1) 調査にいたる経緯と調査方法

平成18年10月、栗原市築館字城生野唐崎46-5における城生野分館改築と浄化槽の設置に伴う協議を受けた。対象地は外郭北側、伊治城期の住居跡が確認された第①次B地区、第③次唐崎地区、第1・2・4・5・10次調査区が行われた地点に近接している。堅穴住居跡などの存在が想定されたことから、浄化槽部分は確認調査、集会場部分は工事立会いを行うこととした。

平成19年7月23日に浄化槽部分について、重機により掘り下げを行ったところ、堅穴住居跡2軒の一部とみられる遺構が確認された。このことから、遺構が確認されなかつた東側に浄化槽の位置を変更することとなった。その後、7月27日に集会場部分の立会いを行った。基礎掘削の深さは0.5mであり、旧建物解体後の盛土及び表土内でおさまり、遺構面までおよばないことが確認された。

### (2) 基本層序

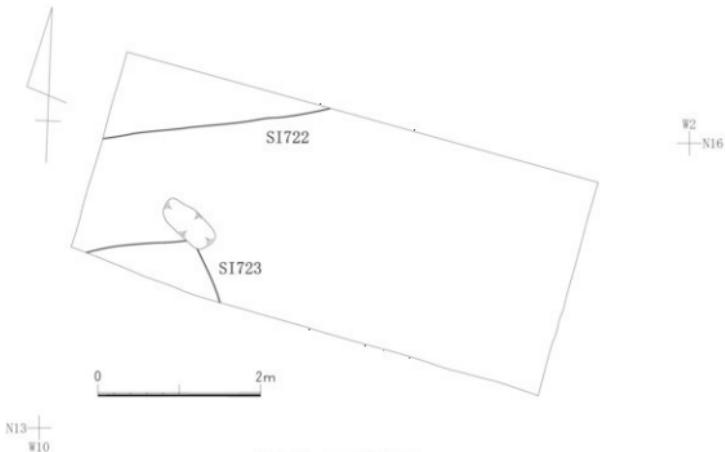
確認された基本層は次のとおりである。

I層 暗褐色（10YR3/3）シルト。厚さ45～65cm。表土。

II層 明黄褐色（10YR5/8）粘土。本調査区内での地山であり、遺構確認面である。

### (3) 検出された遺構と遺物

検出された遺構は堅穴住居跡2軒である（第23図）。遺構は平面のみの確認とし、精査は行わなかつた。



第23図 V-4調査区

#### 【SI722住居跡】

調査区北西隅の地山面で南辺が確認された竪穴住居跡である。遺構は調査区北西に続く。平面規模は東西0.96m以上、南北2.72m以上である。方向は南辺で計測するとE-10°-Nである。平面形は不明である。堆積土は地山粒を含む褐色シルトである。

遺物は堆積土より製作にロクロを用いない土師器甕の底部破片が出土している。外面はナデ、底面に木葉痕、内面はナデが行われている。

#### 【SI723住居跡】

調査区南西隅の地山面で北西隅部分が確認された竪穴住居跡である。遺構は調査区南側に続く。平面規模は東西1.25m以上、南北1.0m以上である。方向は北辺で計測するとE-9°-Nである。平面形は方形を基調とすると考えられる。堆積土は地山粒を含み、炭粒を微量含む褐色シルトである。

遺物は堆積土より製作にロクロを用いたとみられる土師器鉢体部片が出土している。外面はロクロナデ、ヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理されているが小片のため図化できなかった。

#### (4) 遺構外出土遺物

表土より須恵器甕の頸部から体部にかけての破片が1点出土している。外面はロクロナデ、内面は押さえ痕跡の後ロクロナデが行われている。

#### (5) まとめ

確認調査の結果、竪穴住居跡の可能性が高い遺構が2軒確認された。調査区の関係や精査を行っていないことから、詳細な規模や時期は不明である。2軒の竪穴住居跡は約1.3m離れ、方向をそろえて



第24図 V-3・V-4調査区の位置と周辺の竪穴住居跡の位置

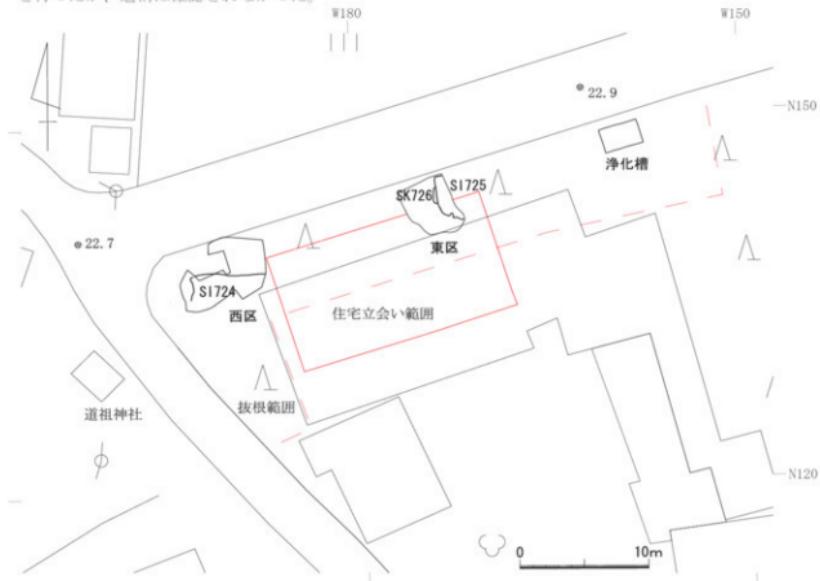
位置している。周辺では伊治城期のものとみられる堅穴住居跡が多数確認されており（第24図）、同一の方向をもつものもある。このことからSI722、SI723は伊治城期のものの可能性が考えられる。

## 5. 個人住宅建設・浄化槽設置工事

### (1) 調査にいたる経緯と調査方法

平成19年4月、栗原市築館字城生野大堀97における個人住宅建設に伴う協議を受けた。対象地は外郭北側、伊治城期の住居跡が確認された第16次調査区の南側に位置する。居久根の抜根や浄化槽の設置が行われること、堅穴住居跡などの存在が想定されたことから、確認調査を行うこととした。

平成19年6月11日に遺構の確認作業を行なながら抜根作業を行った。しかし、部分的に地山面を確認できないまま抜根作業を行ったため、対象地の北西隅で住居跡が確認されるとともに、中央付近では抜根と同時に多数の土器が出土することとなった。抜根された木の根より遺物の回収を行うとともに、遺構検出面よりも深く抜根が行われたために堅穴住居跡の残存状況を確認する必要が生じた（東区）。木の根に含まれる遺物は焼土とともに重なった状況で確認されたが、詳細な状況は把握することが出来なかった。さらに北西隅の抜根地点（西区）で確認された堅穴住居跡についても記録作成を行い、6月13日に確認作業を終了した。その後、住宅建設に伴い敷地全体に盛土が行なわれ、基礎掘削の際工事立会いを行った。地山の標高が高い南側で部分的に地山が確認されたが、遺構は確認されなかつた。その後、浄化槽設置に伴い、住居跡が確認された地点から東にずらして6月27日に確認調査を行つたが、遺構は確認されなかつた。



第25図 V-5調査区の位置

## (2) 基本層序

確認された基本層は次のとおりである。

I 層 黒褐色土。確認された厚さは27~68cm。抜根された部分は深くなっている。

II 層 明黄褐色（10YR6/6）粘土で、本調査区内での地山である。遺構はこの面で検出している。

## (3) 検出された遺構と遺物

検出された遺構は堅穴住居跡2軒と土坑1基である（第25図）。平面のみの確認としたが、抜根により破壊された西区の堅穴住居跡については断面記録も作成した。

### 【SI724住居跡】（第26図）

西区のII層で確認された堅穴住居跡である。北西隅付近が確認された。重複する遺構は確認されなかった。平面形は隅丸方形と考えられる。規模は東西5.82m以上、南北1.90m以上である。方向は西辺で計測するとN-1° -Wである。抜根により北側から西側が大きく壊された。北辺中央付近で深さは0.52mであり、地山を床としている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は黒褐色粘土質シルトや灰黄褐色粘土質シルトであり、床面を覆う黒褐色粘土質シルトには炭粒が含まれる。また、西辺の床面付近に残存する堆積土中には焼土が含まれている。壁際では壁材抜き取り痕跡と掘り方とみられる土層が確認された。壁材掘り方の深さは8cmである。

遺物は堆積土より製作にロクロを用いないとみられる土師器鉢の体部破片、甕の口縁部破片、体部破片が出土している。いずれも小片のため、詳細な特徴はつかめなかった。

### 【SI725住居跡】（第26図）

東区のII層で確認された堅穴住居跡である。西側が確認された。SK726と重複し、これより新しい。平面形は隅丸方形と考えられる。規模は東西1.73m以上、南北3.49mであり、深さは抜根部分で観察すると検出面より0.37mである。方向は西辺で計測するとN-8° -Wである。堆積土は確認された北半では地山粒や炭化物を含む黒褐色粘土質シルトで自然堆積と考えられる。また、確認面の南半では住居壁際に沿って炭化物や地山粒を含む焼土（赤褐色シルト）が広範囲に確認された。焼土は黒褐色粘土質シルトに覆われる。前述のほかに抜根された根の地表面に近い部分に灰白色火山灰層が確認された。このことから、住居廃絶後、火山灰が降下する時期には窪地となっていたと考えられる。

遺物は南西隅が幅約1mにわたり、大きく壊された抜根部分から多数出土した。抜根作業直後に確認された遺物と木の根の中より採集した遺物がある。明確な出土状況は不明である。遺物に付着する堆積土の特徴については第6表に記載したが、抜根作業直後に確認された遺物は付着する土の状況や器面に残された痕跡から重なっていたとみられ、さらに木の根の中から採集された遺物は床面と見られる地山の直上や壁付近の堆積土（焼土を含む層）から採集され、重なった状況で出土したものもあった。確認された遺物には焼土を含む層より須恵器坏、高台付坏、坏蓋、甕、土師器鉢、抜根直後に出土した須恵器坏、高台付坏、坏蓋、甕、鉢、土師器坏、壺、SI725に掘り込まれた搅乱より出土した須恵器高台付坏、甕などがある。

第6表 遺物に付着する土の特徴およびその他の痕跡

S1725南西隅付近抜根直上

登録番号	種類	器種	特徴・その他
1-1	須恵器	坪蓋	内面につまみの当たり痕跡あり。口縁部に炭化物。外側にも炭化物若干あり。
1-2	須恵器	坪蓋	1-1のつまみの径とは一致するが、2の外側に上面には炭化物が濃密に付着するが1には認められないでこれらが重ねてあつたから不明。
1-3	須恵器	高台杯	外側に燒土粒?を含む土が付着。2-4(外側に燒土)と接合。
1-5	須恵器	坪	内面にわずかに燒土付着。
1-6	須恵器	高台杯	内面にわずかに燒土付着。
2-1	須恵器	坪蓋	内面に燒土。
2-2	須恵器	盤	体部破片で外側に炭化物付着。実測図未掲載。
2-5	土師器	高台杯	内面の土の状況から重ねてあったか。付着物不明。
2-6	須恵器	甕底部	残存範囲で焼土・炭化物はなし。付着する土は堆積土のものとは異なる。
3	土師器	釜	内部に入り込む土の上部にわずかに炭化物あり。外側には一切付着しない。
4-1	須恵器	坪蓋	外側に燒土、内面に炭化物。
4-2	須恵器	坪蓋	内面に炭化物底状に付着。
4-3	須恵器	坪蓋	外側つまみ部破損。燒土付着。内面に炭化物付着。4-4が上にのる。
4-4	須恵器	坪蓋	外側に炭化物微量。内面に炭化物、焼土粒微量。4-3のつまみ部と同形態の傷付着。4-3が下になる。
4-5	須恵器	高台杯	4-6がなかにはいる。外側底部に燒土。5と6の間に炭化物が入り込む。
4-6	須恵器	坪	4-5のなかにはいる。5と6の間に炭化物が入り込む。
4-7	須恵器	坪蓋	内外に燒土炭化物付着。内面に新しい傷あり。重ねてあったものか。
4-8	須恵器	高台杯	外の底部に燒土。内部にも燒土。15-7(1縁部破片、外側に炭化物付着)と接合。
4-9	須恵器	高台杯	外の底部に燒土。15-4(1縁部破片、内面に燒土粒)と接合。
4-10	須恵器	坪蓋	内側に新しい傷。細かい炭化物。外に燒土・炭化物付着。
4-11	須恵器	坪	外に燒土。1-4(底部破片、内面立ち上がり付近に炭化物、燒土付着)と接合。

S1725木の根より回収。8-7の順で取り上げ。焼土層に覆われ、いずれも近接する。

登録番号	種類	器種	特徴・その他
8-1	須恵器	高台杯	
8-2	須恵器	高台杯	外側底部に焼土粒付着。8-3が中に入る。
8-3	須恵器	坪	外側に重ねてあった際の痕跡。8-2の内部にあり。
6-1	須恵器	坪	内面に炭化物。
6-2	須恵器	高台杯	内面に炭化物。
6-3	須恵器	坪	内面に燒土。
9	須恵器	高台杯	外周部に炭化物多数。底には燒土付着。
7-1	土師器	鉢	2-3(内面に燒土)、15-6(外側に燒土粒)と接合。
7-2	須恵器	坪	内面に燒土・炭化物若干。
7-3	須恵器	坪蓋	

東区探乱土より回収

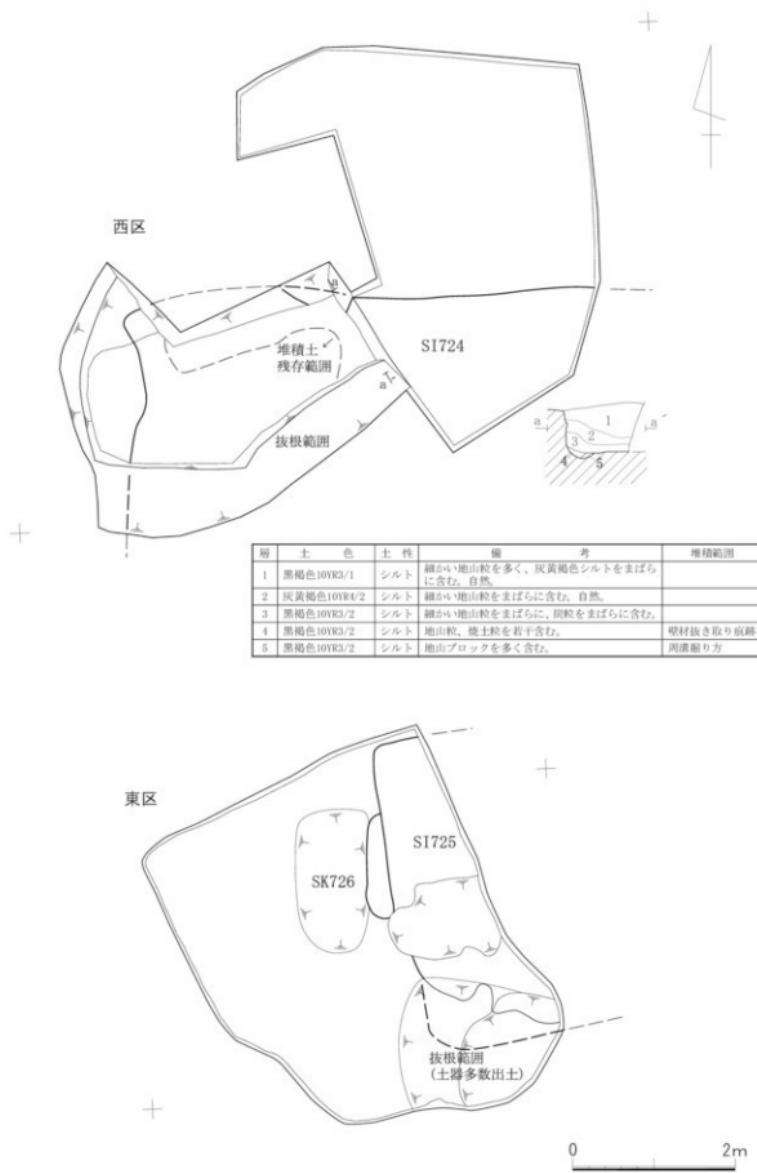
登録番号	種類	器種	特徴・その他
15-2	須恵器	坪	内面に燒土。
15-3	須恵器	坪	内面に燒土。
15-5	須恵器	坪	口縁部破片。外部に燒土粒。
16-1	須恵器	坪	内面に残存する土に燒土粒と炭化物がまばらにある。
16-2	須恵器	甕(大)	外側に炭化物微量。実測図未掲載。
16-3	須恵器	甕(小)	内面に炭化物微量。実測図未掲載。

S1725上の擾乱

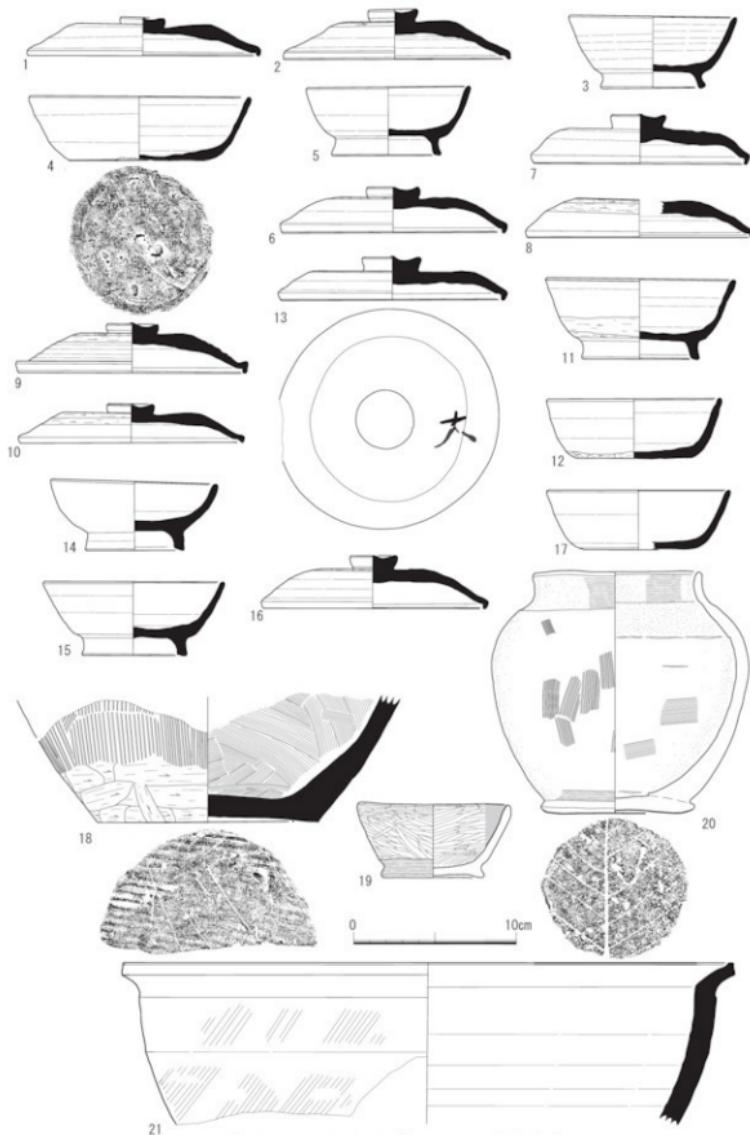
登録番号	種類	器種	特徴・その他
24-2	須恵器	高台杯	外の底部に燒土・炭化物付着。

抜根後の表土(S1724とS1725の中間付近)

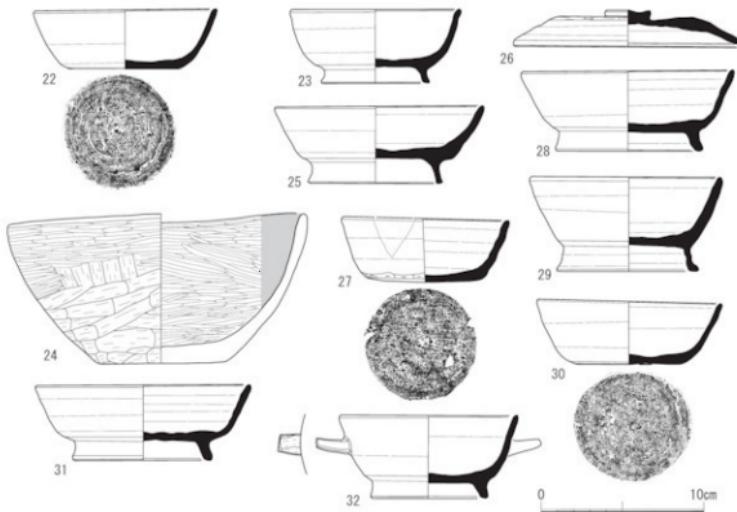
登録番号	種類	器種	特徴・その他
5	須恵器	高台杯	内面に燒土。外側底部に灰白?小ブロック付着。



第26図 SI724・SI725住居跡、SK726土坑



第27図 SI725出土遺物（1）—拔根直後—



第28図 SI725住居跡出土遺物（2）一焼土層・黒色土層一

#### 【SK726土坑】（第26図）

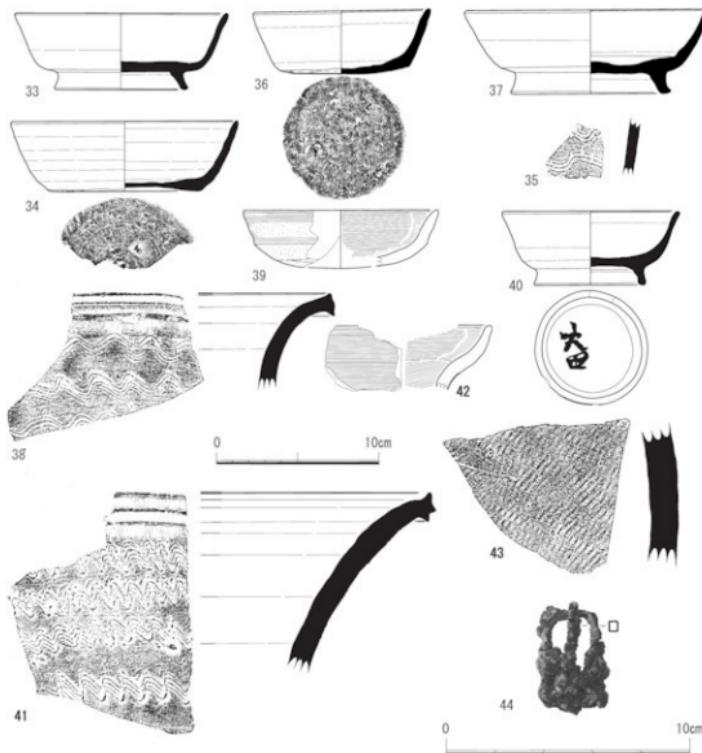
東区のII層で確認された。SI725と重複し、これより古い。平面形は隅丸長方形と考えられる。長軸1.28m、短軸0.31m以上である。堆積土は褐色土を含む黒褐色シルトである。  
遺物は出土していない。

#### (4) 遺構外出土遺物

東区の抜根により動かされた搅乱土より多数の遺物が確認されている。須恵器、土師器が出土した。須恵器壺や底部に墨書きされた高台付壺がある。SI725出土遺物と特徴が類似することから、本来はSI725に伴うものであろう。さらに搅乱土からは鉄製品（絞具）1点が出土している。また、西区と東区の中間付近の廃土、西区でも少数ではあるが、遺物が出土した。ここでは特徴のわかる遺物について図示する。

第7表 V-5 確認調査出土遺物観察表 (第27~29図)

%	場所	種別	器種	特徴	写真版	登録
1	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: ほぼ完形。器高2.4cm、口径14.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1~7.5Y/1)。内側: ロクロナデ。灰白色(17.5YR/1~17.5Y/1)。		1-1
2	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 完形。器高3.0cm、口径15.7cm。外側: 天井部斜面・ベラケズリ、ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1)。		1-2
3	抜根直後	乳母器	高台付壺	現存: 3/4。器高1.8cm、口径10.0cm。底径6.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)~暗灰色(5N/0)。底部: 回転へタ切りの後ロクロナデ。内側: ロクロナデ。灰白色(5Y/0)。		1-3
4	抜根直後	乳母器	壺	現存: ほぼ完形。器高1.0cm、口径13.4cm。底径9.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)。底部: 回転へタ切りの後ロクロナデ。縦敷の焼成前剥離「×」。		1-5
5	抜根直後	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高3.0cm、口径10.0cm。底径6.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1)~暗灰色(2.5YR/2)。底部: 重ね焼の痕跡。		1-6
6	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 完形。器高2.8cm、口径13.5cm。外側: 天井部斜面・ベラケズリ、ロクロナデ。灰白色(NR/0)~淡灰色(5YR/0)。内側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1~5YR/2)。		2-1
7	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 完形。器高3.0cm、口径12.8cm。外側: 天井部斜面・ベラケズリ。内側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)~暗灰色(5YR/2)。		4-1
8	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 完形。器高3.0cm、口径11.0cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1)~暗灰色(5YR/1)。内側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)。		4-2
9	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 4/5。器高1.0cm、口径13.8cm。外側: 天井部斜面・ベラケズリ、ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1)。		4-3
10	抜根直後	乳母器	壺	現存: ほぼ完形。器高2.4cm、口径13.6cm。外側: 天井部斜面・ベラケズリの後、全体をロクロナデ。		8-11
11	抜根直後	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高5.0cm、口径11.5cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。回転へタケズリ。		4-5
12	抜根直後	乳母器	壺	現存: 完形。器高3.0cm、口径10.0cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。画面付部を一部剥離。内側: ベラケズリ・暗灰色(5N/0~5S/0)。		4-6
13	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 完形。器高2.6cm、口径15.3cm。外側: ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1)。内側: ロクロナデ。		4-7
14	抜根直後	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高4.0cm、口径10.0cm。底径10.5cm。外側: ロクロナデ。底部(5N/0)~暗灰色(7.5YR/1)。		4-8
15	抜根直後	乳母器	高台付壺	現存: 3/4。器高1.5cm、口径10.9cm。底径6.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(5Y/2)。		4-9
16	抜根直後	乳母器	壺蓋	現存: 完形。器高3.0cm、口径10.0cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。内側: ベラケズリ・暗灰色(5YR/1)。		4-10
17	抜根直後、 土壠	乳母器	壺	現存: 3/5。器高3.0cm、口径11.2cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。画面付部に一部剥離。内側: ベラケズリ・及ぶ、灰白色(2.5YR/1)。		4-11
18	抜根直後	乳母器	壺	現存: 底部・壺蓋、器高2.7cm。底径13.4cm。外側: 平手タキの後手部を手持ち・ベラケズリ。		8-9
19	抜根直後	土師器	壺	現存: 完形。器高4.5cm、口径10.0cm。底径8.0cm。外側: ハラミガキ、外底部分横ナデ。に点状・黄緑色(10YR/7.5)~黒褐色(2.5Y/5)。		8-3
20	抜根直後	土師器	壺	現存: 土器部の口火が欠け、ほぼ完形。器高1.8cm、口径9.0cm。外側: ハラミガキ、外底部分横ナデ。内側: 横ナデ・ハクメ、黄褐褐色(10YR/6)~墨褐色(10YR/1)。底部: 木葉斑。		8-5
21	抜根直後	乳母器	鉢	現存: 口火部一帯・器底・器側部。器高9.0cm、口径10.0cm。外側: 平手タキの後ロクロナデ。		2-15
22	焼土壠	乳母器	壺	現存: 完形。器高3.0cm、口径11.0cm。底径3.7cm。外側: ロクロナデ。灰白色(7.5YR/1)。		6-1
23	焼土壠	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高4.5cm、口径10.0cm。底径6.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)。		8-4
24	焼土壠	土師器	鉢	現存: 3/4。器高9.2cm、口径13.7cm。底径7.0cm。外側: ハラケズリの巻上部をラミガキ。に点状・黄褐色(10YR/7.5)~墨褐色(10YR/2)。		8-7
25	焼土壠	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高4.0cm、口径10.0cm。底径8.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)。		7-2
26	焼土壠	乳母器	壺蓋	現存: ほぼ完形。器高2.8cm、口径13.7cm。外側: ロクロナデ。回転へタ切りの後ロクロナデ。灰白色(5Y/2)~灰褐色(10YR/8)。		8-6
27	焼土壠	乳母器	壺	現存: 完形。器高4.2cm、口径10.0cm。底径6.0cm。外側: ロクロナデ。底部・口火を手持ち・ベラケズリ・暗褐色(5YR/1)。		6-3
28	焼土壠	乳母器	高台付壺	現存: ほぼ完形。器高4.0cm、口径10.0cm。底径8.0cm。外側: ロクロナデ。内側: ロクロナデ。灰白色(5YR/0)。		8-1
29	焼土壠	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高4.0cm、口径11.0cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。内側: ロクロナデ。灰白色(5YR/0)。		8-2
30	焼土壠	乳母器	壺	現存: 完形。器高3.0cm、口径11.0cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)。		8-3
31	焼土壠	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高4.0cm、口径11.0cm。底径8.0cm。外側: ロクロナデ。内側: ロクロナデ。灰白色(5YR/1)。		9
32	黒色土	乳母器	双耳壺	現存: 7/8。器高1.0cm、口径10.8cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。底部(5YR/1)~耳の厚さ0.9cm。内側: ロクロナデ。内底部(5YR/1)~耳部(5YR/1)。		10
33	抜根後の表土	乳母器	高台付壺	現存: 1/2。器高4.0cm、口径12.8cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。黄灰色(2.5YR/1)。		5
34	東区陥乱土	乳母器	壺	現存: 3/5。器高4.3cm、口径12.8cm。底径9.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(2.5YR/2)。口縁部付部墨褐色(2.6YR/2)。		16-1
35	東区陥乱土	乳母器	鉢	現存: 1/2。器高4.0cm、口径12.8cm。底径9.0cm。外側: ロクロナデ。灰白色(2.5YR/1)。		16-2
36	東区陥乱土	乳母器	壺	現存: 完形。器高2.0cm、口径10.0cm。底径7.0cm。外側: ベラケズリ・切妻口火。内側: ロクロナデ。底部(5YR/0)~底火(5N/0)。		15-2
37	S1725の表土	乳母器	高台付壺	現存: 1/2。器高4.0cm、口径12.8cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。内側: ロクロナデ。底部(5YR/1)。		24-1
38	東区陥乱土	乳母器	壺	現存: 1/2。器高4.3cm、口径12.8cm。底径9.0cm。外側: ロクロナデ。灰褐色(2.5YR/2)。		21
39	西区表土	土師器	壺	現存: 1/3。外側: 横ナデ・摩擦(ケリナ)。灰白色(2.5YR/2)。内側: 横ナデ・ナデ。		25-2
40	東区陥乱土	乳母器	高台付壺	現存: 完形。器高5.0cm、口径10.6cm。底径6.0cm。外側: ロクロナデ。内側: ハラケズリ・切妻口火。		8-10
41	S1725の陥乱	乳母器	壺	現存: 1/2。器高4.0cm、口径12.8cm。底径7.0cm。外側: ロクロナデ。灰褐色(2.5YR/1)。		24-2
42	西区表土	土師器	壺	現存: 1/2。外側: 横ナデ。灰褐色(2.5YR/2)。内側: 横ナデ。淡黄色(2.5YR/3)。東北北部系。		25-1
43	道祖神社表塚	乳母器	壺	現存: 1/2。外側: 体部・口火。平手タキ・ヒラコナ・ヘラコナ?。灰褐色(10YR/1)。		26
44	東区陥乱土	鉄製品	釦	現存: ほぼ完形。長さ1.8cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm。錫取り未施。		16-3



第29図 SI725上の搅乱・東区搅乱土・西区出土遺物

##### (5) SI725出土遺物について

抜根作業中に出土したため、詳細な出土状況のデータを作成することはできなかつたが、器面に残された痕跡や木の根の中からの回収作業により、重なつた状態で遺物が出土することを確認することができた。木の根の中から回収した遺物は床面とみられる地山面とその上に堆積する焼土層からの出土である。堆積上の状況からSI725は火災にあった可能性が考えられる。このことから、出土遺物のうち、重なつていたもの、焼土が付着するものはSI725廃絶時には住居内に残されていた一括性の高いまとまりのある遺物と捉えることができる。また、黒色土から出土した双耳环は高台付环と類似する器形であることからまとまりのある遺物に含まれるとみられることから、まとまりのある遺物は第30図に示したものとなる。ここでは、若干の分類を行い、類例をもとに年代を検討する。

分析対象となるものは須恵器环6点、高台付环10点、双耳环1点、坏蓋10点、土師器环1点、鉢1点、壺1点である。須恵器环では底部切り離しをみるとほとんどのもので回転ヘラ切り後再調整が行

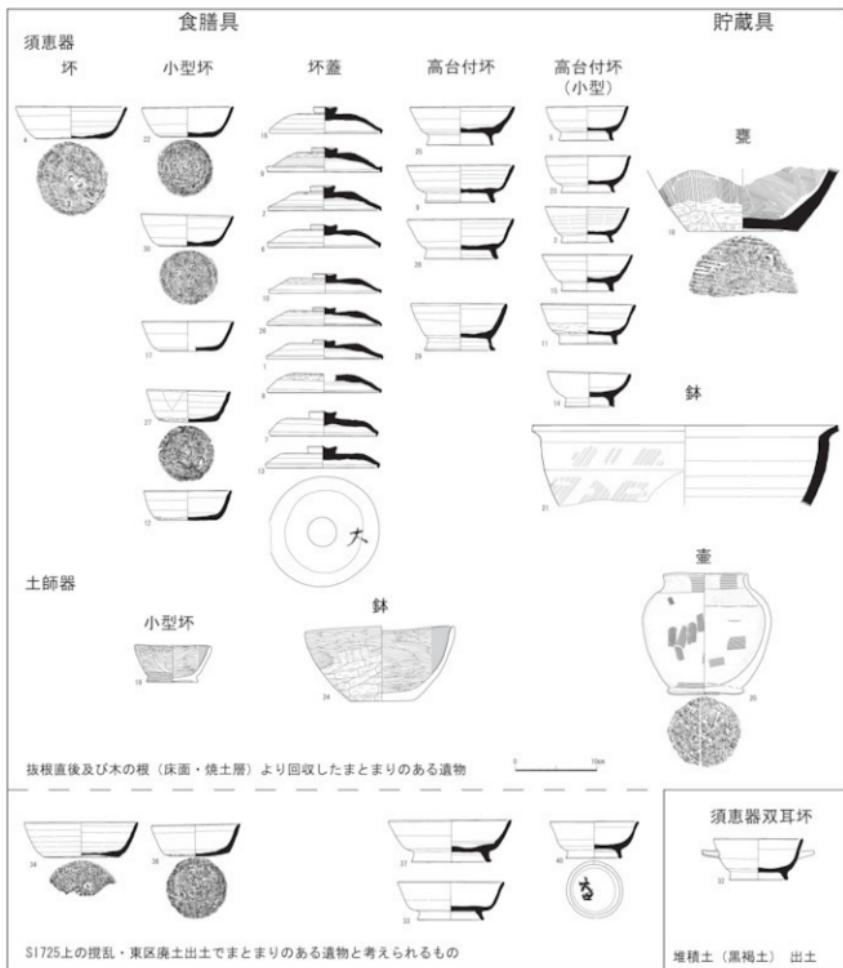
われるものであるが、回転ヘラケズリのものもわずかにある。器形はいずれも椀状のものであり底部から外傾して口縁部に至るものである。大きさをみると口径13~14cm台のものと10cm台のもの(以下、小型坏と呼ぶ)があり、法量分化が認められる。高台付坏も坏と同様の底部切り離し技法や器形であるが、底部から内湾しながら口縁部に至るものがある。高台部は高く、外側に踏ん張るものもある。大きさをみると坏と同様に14cm台のものと10~12cm台の小型のものに分けることができる。双耳坏は上記の小型の高台付坏と類似する器形と大きさをもつ。短く、幅の狭い耳がつく。坏蓋では器高が高くなく、天井部から口縁部にかけて丸みを持つものがほとんどであるが、中央がややくぼむ平坦な天井部から屈曲し体部が直線的に外傾するものがある。天井部は回転ヘラケズリされるものが多い。つまりはいずれも扁平な宝珠である。口径14cmを前後するもののみである。

土師器では破片も含め、いずれも製作にロクロを用いないもののが出土した。鉢は平底で体部に段を持たないものである。坏や壺については類例が少ないものである。壺は円盤状の粘土を底部としている。坏は擬似高台風に底部がくぼむもので、小型の須恵器高台付坏を模倣したものと考えられる。

出土した須恵器のうち、小型のもの以外はこれまでの伊治城跡の調査で確認されるものと類似するが、器種構成や遺物の細部をみるとやや異なる。火災以降のもので、製作にロクロを用いる土師器が出土することから8世紀末~9世紀初頭ころのものと考えられるSI04(多賀城研1979)、SI173(築館町教委1991)、SX324(築館町教委1993)は、坏では底部切り離しが回転ヘラ切り無調整のものが含まれるとともに、器高約3cmの皿形のものがある。坏蓋では天井部から口縁部にかけて丸みが少なく直線的な器形のものが含まれる。なお、土師器鉢と類似するものはSK364(築館町教委1994)では3点出土している。

須恵器の小型坏は、これまでの伊治城跡の発掘調査ではほとんど類例のないものである。SI401堆積土出土遺物のなかに器高はやや高いが類似する器形と大きさのものが含まれている(築館町教委1995)が、住居跡に伴うものではなかった。また、SI173、SX324、SK364で出土した須恵器の小型坏は、器形が底部からほぼ直立して立ち上がり、底部切り離しが回転糸切りによるものという相違があった。しかし、近年実施された第33次調査では火災にあったSB660外郭南門跡より古いSX666基礎整地より1点、火災後に造営されたSF676築地跡に覆われる火災直後に人為的に埋め戻されたSX667整地より1点出土している(栗原市教委2007)。SB660は宝亀11年(780)におこった伊治公皆麻呂の乱に際し、焼失したと想定されている。このことから、SI725から出土した須恵器の小型坏は780年以前には用いられており、火災後はほとんど用いられなくなった器種である可能性が想定される。また、SI725からは製作にロクロを用いる土師器が出土していないことから8世紀末以前のものである可能性が考えられる。伊治城跡以外で類似する須恵器の小型坏が出土しているものとしては、小型坏の形態がやや異なるが大崎市田尻新田柵跡推定地SI173b(田尻町教委1998)がある。また、名生館官衙遺跡SI82(多賀城研1982)では小型の高台付坏が出土している。これらは8世紀後半と考えられていることから、SI725は8世紀後葉頃のものと考えられる。

床面の精査を実施しておらず、土師器坏がほとんどないなど出土遺物の器種構成が確認されていないという問題点はあるが、SI725は火災にあっていることから、宝亀11年(780)の際火災にあったという想定が可能と考えられる。しかし、これまで確認してきた火災後にかかる遺構(SK324、SK364



第30図 S1725住居跡出土遺物分類

及びSI04、SI173)から出土している遺物とは異なる点が多いという問題点があり、780年以前に位置付けられることも考えられる。S1725出土遺物の年代的位置付けについては伊治城跡での類例の増加をまってさらに検討を進める必要がある。

註 なお、S1725出土遺物の中にはSI173出土遺物の中に含まれる石巻市河南須江窯跡群の製品は含まれていないことを東松島市教育委員会佐藤敏幸氏に実見していただいた際にご教授いただいた。

## (6) まとめ

抜根作業により、不本意ながら堅穴住居跡2軒が確認された。西区の南側付近では地山面が確認されない状況で抜根作業を行ったことから、確認することができなかつた堅穴住居跡の存在も想定される。隣接する第16次調査区や近接する第②次調査区では11軒の堅穴住居跡が確認されており、この地区周辺には多数の住居跡が分布している。

確認されたSI725は堆積土の状況や遺物の回収状況から焼失住居跡と考えられる。また、出土遺物は一括性の高いまとまりのある遺物と捉えられる。伊治城跡の土器編年を考える上で基準となるものであり、出土遺物の検討から8世紀後葉頃のものと想定される。この年代観は宝亀11年（780）におこった伊治公啓麻呂の乱の年代を含んでいることから、SI725はこの際に焼失したことも想定される。なお、抜根により破壊された約1m四方の範囲内から須恵器6点、高台付坏10点、坏蓋10点、甕底部破片1点、鉢1点、土師器坏1点、鉢1点、壺1点など合計31点という遺物が出土した。須恵器が圧倒的に多いこと、小型の製品が多いこと、須恵器高台付坏の口径が小さく坏蓋と組み合わないものが多いという特徴がある。また、数点で使用されたとみられる黒色物質の付着もみられる。周辺で調査が行われたSI04では床面や床面施設から34点出土しているが、今回SI725の一部から出土した31点という点数は1棟の堅穴住居で使用されたものとしては異様なまでに多いことが指摘できる。遺物が集中して分布する範囲を破壊してしまったという可能性も残るが、SI725は土器類などを収納していた施設であるという可能性も想定される（註）。詳細は将来的調査をまつ必要がある。

なお、今回の調査は伊治城跡内における抜根工事に際し、調査体制及び方法の検討と反省を迫るものであったと考えられる。

註 地域や時期は異なるが、埼玉県中條遺跡では火災にあった建物内から大量の土器が出土している。食器を含む収納施設と考えられている（田中広明2003）。

付表1 伊治城跡の発掘調査

## ◎多賀城跡調査研究所による調査

年次	調査原因	発掘面積	発掘期間	主な検出遺構と出土遺物	文献
昭和51年度 (1976)	地形図測量(航空測量) 現地踏査・研究史整理				
昭和52年度 (1977)	①外郭北辺区画施設発掘調査 外郭北辺区画施設	168m <sup>2</sup> 270m <sup>2</sup>	7/4~8/3	大溝1、土壙1、土壙状遺構1 壠穴堅穴住居1、墳墓土器「城厨」	(1)
昭和53年度 (1978)	②外郭北部発掘調査 外郭北辺区画施設電気探査	780m <sup>2</sup>	7/3~8/4	掘立柱建物1、堅穴住居4	(2)
昭和44年度 (1979)	③外郭北部発掘調査	1,000m <sup>2</sup>	10/29~12/4	掘立柱建物2、堅穴住居17	(3)

## ◎栗原市教育委員会・宮城県教育委員会による調査(1987~2004は旧栗館町教育委員会による調査)

年次	調査原因	発掘面積	発掘期間	主な検出遺構と出土遺物	文献
昭和62年度 (1987)	1. 農道整備	220m <sup>2</sup>	7/1~8/12	堅穴住居5(焼失1)	(4)
	2. 農協支所移転	150m <sup>2</sup>	7/4~7/18	堅穴住居1	
	3. 個人住宅便橋敷付	2m <sup>2</sup>	8/5		
	4. 水道管理設	1,250m <sup>2</sup>	9/1~9/14	堅穴住居8	
	5. 農道整備	1,080m <sup>2</sup>	1/18~2/9	堅穴住居7	
	6. 施設建築	80m <sup>2</sup>	2/25		
昭和63年度 (1988)	7. 国庫補助事業	1,500m <sup>2</sup>	7/1~10/30	内郭北溝、堅穴住居2	(5)
	8. 水道管理設	142m <sup>2</sup>	11/4~11/24	外郭東辺大溝? 堅穴住居3	
	9. 農道整備	504m <sup>2</sup>	2/6~2/12		
平成元年度 (1989)	10. 地形現状変更	480m <sup>2</sup>	4/11~6/1	掘立柱建物1、堅穴住居9、土器埋設1	(6)
	11. 国庫補助事業	1,200m <sup>2</sup>	7/21~11/22	【内郭南西】区画施設、外溝、掘立柱建物3、堅穴住居10	
	12. 通字路整備	1,700m <sup>2</sup>	9/5~9/16	外郭北辺大溝、古墳前期居指跡区画溝	
	13. 農道整備	1,960m <sup>2</sup>	10/16~11/20	内郭区画施設、外溝。【政庁】正殿、北西律物	
平成2年度 (1990)	14. 水道管理設	170m <sup>2</sup>	11/29~12/8	堅穴住居3?	(7)
	15. 国庫補助事業	900m <sup>2</sup>	9/3~9/29	【内郭北西】掘立柱建物3、堅穴住居8	
	16. 道路整備(大堀線)	1,320m <sup>2</sup>	9/27~10/5	外郭東辺大溝? 【外郭北部】堅穴住居16	
平成3年度 (1991)	17. 国庫補助事業	1,300m <sup>2</sup>	5/27~7/16	【政庁】正殿、北殿、北西律物・東北建物・塙地	(8)
	18. 個人住宅	300m <sup>2</sup>	11/19~12/2	古墳前期灰陶	
平成4年度 (1992)	19. 国庫補助事業	1,300m <sup>2</sup>	5/11~7/4	【政庁】正殿・前殿・西脇殿・日隱殿・南門・塙地 【内郭南西】塙地? 掘立柱建物2、堅穴住居1	(9)
	20. 国庫補助事業	1,500m <sup>2</sup>	10/4~11/18	【内郭南西】塙地? 掘立柱建物5、堅穴住居2 【内郭南東】区画施設2、外溝、掘立柱建物1、堅穴住居5	
平成6年度 (1994)	21. 国庫補助事業	820m <sup>2</sup>	10/3~11/27	【内郭北部】( A 8 S ■ P A G Z X ) 【内郭南西】掘立柱建物5、堅穴住居3	(10)
	22. 国庫補助事業	1,140m <sup>2</sup>	10/5~11/14	【内郭北部】掘立柱建物1 【外郭南西端】外郭北区画施設・大溝、掘立柱建物1 【外郭南西側】掘立柱建物3	
平成8年度 (1996)	23. 国庫補助事業	450m <sup>2</sup>	10/7~11/7	【外郭西辺】区画施設・大溝 【外郭西端】掘立柱1、堅穴住居1	(11)
	24. 国庫補助事業	480m <sup>2</sup>	10/6~11/7	【外郭北辺】土壙、大溝、堅穴住居1	
平成10年度 (1998)	25. 国庫補助事業	450m <sup>2</sup>	10/23~11/13	【外郭東辺】区画施設、大溝 【外郭南東】掘立柱建物2、堅穴住居8	(12)
	26. 国庫補助事業	200m <sup>2</sup>	11/8~11/22	【内郭南東端】区画施設、大溝 【外郭南東】堅穴住居12、「機」報告	
平成12年度 (2000)	27. 国庫補助事業	500m <sup>2</sup>	10/16~11/8	【外郭南端部】掘立柱建物13	(13)
	28. 国庫補助事業	400m <sup>2</sup>	11/5~11/15	【外郭南西部】掘立柱建物7、堅穴建物1、堅穴住居2	
平成15年度 (2003)	29. 国庫補助事業	500m <sup>2</sup>	10/3~11/6	【外郭南辺部】掘立柱建物、旧石器	(14)
	30. 国庫補助事業	450m <sup>2</sup>	11/1~12/10	【外郭南辺部】掘立柱建物2、土取りによる溝状遺構	
平成17年度 (2005)	31. 国庫補助事業	400m <sup>2</sup>	8/29~10/17	【外郭南辺部】掘立柱建物、区画施設、土取りによる溝状遺構	(15)
	32. 農道整備事業	230m <sup>2</sup>	10/25~2/28	【外郭西辺部】堅穴住居1、溝2、井戸跡1	
平成18年度 (2006)	33. 国庫補助事業	300m <sup>2</sup>	11/1~12/27	【外郭南辺部】掘立柱建物2、築地2、土取りによる溝状遺構、溝2	(16)
	34. 農道整備事業	300m <sup>2</sup>	4/24~8/27	【外郭西辺部】区画施設・区画溝3、堅穴住居跡1、溝12、井戸跡12	
平成19年度 (2007)	35. 国庫補助事業	300m <sup>2</sup>	9/28~11/16	【内郭南部】溝8、掘立柱建物跡2、材木列跡1	(17)
	36. 国庫補助事業	310m <sup>2</sup>	10/17~12/12	【外郭西部】掘立柱建物4、堅穴住居跡5、古墳3	
平成20年度 (2008)	37. 住場整備事業	698m <sup>2</sup>	11/19~12/2	【遺跡北側地域】スカモ局確認	本書

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍田中多太麻呂 らに叙位、外從五位下道嶋三山は從五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12. 陸奥や他国百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に板東8国百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡を置く。これはもと伊治城である。 (「続日本紀」では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみ られ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる) 6. 浮君の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀 続日本紀 続日本紀 続日本紀
778	宝亀9	6. 志波村の蝦夷との戦いで功績のあった陸奥・出羽の国司以下 2267人に位階・勲位を授ける。伊治公皆麻呂は外從五位下を賜う。	続日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公皆麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大柄、按察使紀広 純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放 火する。	続日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘に妨げら れて果たせないでいることを訴える。	類聚国史 卷190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民 9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀 日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅を置く。	日本後紀
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の 百姓多く逃亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定 まらないで援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 志波姫神社 小6座 表刀神社 雄悦神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 遠流志別石神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國 .....志太、栗原、磐井..... ○兵部式 陸奥国駿馬 .....玉造、栗原、磐井..... 各5疋	延喜式
931 ? 938	承平年間	和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郷名)栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄

## 伊治城跡発掘調査報告書等一覧

- (1) 宮城県多賀城跡調査研究所1978 :『伊治城跡I -昭和52年度発掘調査報告書』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊  
(2) 宮城県多賀城跡調査研究所1979 :『伊治城跡II -昭和53年度発掘調査報告書』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第4冊  
宮城県多賀城跡調査研究所1980 :『伊治城跡III -昭和54年度発掘調査報告書』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第5冊  
(4) 築館町教育委員会1988 :『伊治城跡 -昭和62年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第1集  
(5) 築館町教育委員会1988 :『伊治城跡 -昭和63年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第2集  
(6) 築館町教育委員会1990 :『伊治城跡 -平成元年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第3集  
(7) 築館町教育委員会1991 :『伊治城跡 -平成2年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第4集  
(8) 築館町教育委員会1992 :『伊治城跡 -平成3年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第5集  
(9) 築館町教育委員会1993 :『伊治城跡 -平成4年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第6集  
(10) 築館町教育委員会1994 :『伊治城跡 -平成5年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第7集  
(11) 築館町教育委員会1995 :『伊治城跡 -平成6年度発掘調査概報』築館町文化財調査報告書第8集  
(12) 築館町教育委員会1996 :『伊治城跡 -平成7年度 : 第22次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第9集  
(13) 築館町教育委員会1997 :『伊治城跡 -平成8年度 : 第23次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第10集  
(14) 築館町教育委員会1998 :『伊治城跡 -平成9年度 : 第24次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第11集  
(15) 築館町教育委員会1999 :『伊治城跡 -平成10年度 : 第25次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第12集  
(16) 築館町教育委員会2000 :『伊治城跡 -平成11年度 : 第26次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第13集  
(17) 築館町教育委員会2001 :『伊治城跡 -平成12年度 : 第27次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第14集  
(18) 築館町教育委員会2002 :『伊治城跡 -平成13年度 : 第28次発掘調査報告書』  
『伊治城跡・嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第15集  
(19) 築館町教育委員会2004 :『伊治城跡 -平成15年度 : 第29次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第17集  
(20) 築館町教育委員会2005 :『伊治城跡 -平成16年度 : 第30次発掘調査報告書』築館町文化財調査報告書第19集  
(21) 萩原市教育委員会2006 :『伊治城跡 -平成17年度 : 第31次発掘調査概報』萩原市文化財調査報告書第1集  
(22) 萩原市教育委員会2006 :『国史跡伊治城跡保存管理計画書』  
(23) 萩原市教育委員会2007 :『伊治城跡 -平成18年度 : 第33次発掘調査報告書』萩原市文化財調査報告書第4集  
(24) 萩原市教育委員会2008 :『伊治城跡 -平成19年度 : 第35次発掘調査報告書』萩原市文化財調査報告書第7集

## 引用・参考文献

- 栗駒町教育委員会1972 :『鳥矢ヶ崎古墳群発掘調査概報』栗駒町埋蔵文化財報告  
栗駒町教育委員会1995 :『長者原遺跡』栗駒町文化財調査報告書第3集  
進藤秋輝1991 :『古代城柵の設置とその意義』「北からの視点」日本考古学協会1991年度宮城・仙台大会資料集pp.131~142  
田尻町教育委員会1998 :『新田柵跡推定地』田尻町文化財調査報告書第3集  
田中広明2003 :『地方の豪族と古代の官人』KASHIWA学術ライブラリー01 柏書房  
築館町教育委員会2003 :『嘉倉貝塚』築館町文化財調査報告書第16集  
築館町教育委員会2005 :『般沢遺跡』築館町文化財調査報告書第18集  
宮城県教育委員会1978 :『雄羅遺跡』宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)』  
宮城県文化財調査報告書第53集pp.44~198  
宮城県教育委員会1980a :『原田遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集pp.409~423  
宮城県教育委員会1980b :『宇南遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書III』宮城県文化財調査報告書第69集pp.501~556  
宮城県教育委員会1980c :『大門遺跡』東北新幹線関係遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第62集pp.273~306  
宮城県教育委員会1980d :『佐野遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書II』宮城県文化財調査報告書第63集pp.425~546  
宮城県教育委員会1982 :『御胸廻跡』東北自動車道遺跡調査報告書IV』宮城県文化財調査報告書第83集pp.307~584  
宮城県教育委員会1983 :『佐内屋敷遺跡』東北自動車道遺跡調査報告書VII』宮城県文化財調査報告書第93集pp.289~546  
宮城県教育委員会1998 :『宮城県遺跡図鑑』宮城県文化財調査報告書第176集  
宮城県教育委員会2003 :『嘉倉貝塚』宮城県文化財調査報告書第192集  
宮城県教育委員会2005 :『下萩沢遺跡・原田遺跡調査成果の概要』第31回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』pp.287~292  
宮城研多賀城跡調査研究所1982 :『名生鶴跡』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第7冊  
宮城県多賀城跡調査研究所2001 :『宮城県多賀城跡調査研究年報2000』(第71次調査)  
宮城県多賀城跡調査研究所2003 :『宮城県多賀城跡調査研究年報2002』(第73次調査)  
宮城県教育委員会2004 :『原田遺跡・下萩沢遺跡現地説明会資料』  
村田晃一1992 :『多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産』  
『大戸窯検討のための会津シンポジウム 東日本における古代・中世窯業の諸問題』  
矢本町教育委員会2001 :『赤井遺跡I』矢本町文化財調査報告書第14集  
栗原寺調査团1963 :『栗原寺の諸問題』『栗原町史』追録第二号. 1135~1147  
萩原市教育委員会2006 :『泉沢遺跡』萩原市文化財調査報告書第2集  
萩原市教育委員会2007 :『水汲遺跡』平成19年度宮城県遺跡調査成果発表会資料』pp.69~72  
萩原市教育委員会2008 :『下萩沢遺跡・宅地造成工事に伴う発掘調査報告書』萩原市文化財調査報告書第6集

# 写 真 図 版

※ 遺物の縮尺は任意



調査区遠景（南東より）



調査区全景（上が北）

写真図版 1



建物跡と竪穴住居跡（上が北）



SB393建物跡とSB731a・b建物跡（北から）

赤：SB393建物跡  
白：SB731a・b建物跡



SB393NIE1柱穴断面



SB731a・b建物跡NIE3柱穴断面



SB731a・b建物跡麻柱穴断面



SB732建物跡（西から）



SB732建物跡柱穴断面



S1733住居跡とSK737土坑（南から）



S1734住居跡とSK741土坑（南東から）



S1740住居跡（北から）



S1735住居跡床面（西から）



S1735住居跡断面（東から）



SD738古墳周溝断面（南から）



SD738古墳周溝底面（南東から）



石器No.1出土状況



石器No.1インプリント



指導委員会現地指導風景



現地説明会風景

写真図版 4



1



2



3



4



5



6

SI735住居跡出土遺物（1～5）

SI733住居跡出土遺物（6）



7



8

SI740住居跡出土遺物（7、8）



9



10

SK737土坑出土遺物（9、10）



遺構外出土遺物  
写真図版 6



V-1 調査区北東端断面



V-2 SK659土坑  
完掘状況（南から）



V-2 SK659土坑  
断面（北西から）



V-3 1区全景（北から）



V-3 2区全景（南から）



V-4 調査区全景（西から）



V-5 SI725住居跡（西から）



V-5 SI725住居跡（南から）



V-5 SI724住居跡（西から）



V-5 SI724住居跡断面（西から）



集合写真



S1725住居跡出土遺物

写真図版 8

## 報 告 書 抄 錄

---

栗原市文化財調査報告書第9集

## 伊治城跡

－平成20年度：第36次調査報告書－

平成21年3月27日 印刷

平成21年3月30日 発行

発 行 宮城県栗原市教育委員会

〒989-5171

宮城県栗原市金成沢辺町沖200番地

TEL:0228-42-3515 FAX:0228-42-3518

印 刷 南部屋印刷株式会社

宮城県栗原市築館高田一丁目7番36号

TEL: 0228-22-2131 FAX:0228-22-2175

---